

---

## 続・モンスターハンターへようこそ！

ればー

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

続・モンスターハンターへようこそ！

### 【Zコード】

Z04060

### 【作者名】

ればー

### 【あらすじ】

高校生の蓮斗はモンスターハンターの世界に入る事を望んだ

## ハンターとの出合（前書き）

全2部からなる「ムーリナーモンスター・ハンターへー」の続編  
ゆえに実質3話目

## ハンターとの出会い

ようやくキャンプに辿りついた時には俺の身体はボロボロだった歩くのもまらない状態の俺の視界に青く四角い物体が映った

蓮斗「あれは・・支給品ボックス！」

俺は身体の痛みを忘れて駆け寄った

そして中から緑色の液体の入ったビンを取り出すと一気に飲み干した

蓮斗「ふはあ・・生き返るぜえ」

不思議なことにそれを飲んだ瞬間からみると身体に力が戻つてくる

これが回復薬か、現実では到底味わえない感覚だな

男「おい！」

俺は背後から聞こえてきた怒鳴り声に驚いて振り向いた

そこには鉄の防具に身を包んだ長身の男がいた  
こいつ・・・ハンターか？

それもそうか、ハンターがいなかつたらこの支給品ボックスがある  
わけないもんな

蓮斗「あーあのこれ、その・・・」

俺は何と説明したらいいのか分からなくてまじついた

男「オレの支給品を！」

その男は俺に歩み寄った

男「第一お前は誰なんだ！？オレのクエストを邪魔しようつたって  
そうはいくか！」

このノッポ・・・人が黙つて聞いてれば・・・

蓮斗「うるせー！こちとらこんなどこに迷い込んで迷惑してんだ！  
ギヤーギヤーわめくんじゃねえ！！」

その男は俺の迫力に驚いた様子だつた

男「いっいい度胸してるじゃねーか・・・お前ハンターか？」

俺は何も考えずに即答していた

蓮斗「そうだ」

男「迷い込んだんだってな、ギルドには所属しているのか?」

蓮斗「いいや・・・」

男「ならこの船に乗れ、俺の村に連れて行つてやる」

男はそう言つと足早に船に乗り込んだ

蓮斗「ああ、ありがとう・・・その・・・」

男「ナオヤ・スネ・ジャングルーネ」

蓮斗「え?」

ナオヤ「俺の名だ」

ナオヤはそう言つと船へ乗り込んだ

ナオヤ「さ、出航だ」

船は鮮やかな海に緩やかな波紋を作りながら密林を後にした  
後でこつそり納品ボックスを覗くとそこには特産キノコが入つてい  
た

こぞ初クエストへーー（前書き）

実質4話目

## これが初クエストへ！！

ナオヤ「ここだ」

ナオヤ・スネ・ジャングルーネことナオヤに連れてこられた場所は密林とまではいかないが緑が豊かな小さな村だった

蓮斗「ここがあんたの村か」

ナオヤ「マスク村」

蓮斗「え？」

ナオヤ「この村の名だ」

ナオヤ「ちょっと待っててくれ」

ナオヤはそう言つと村の中心にいる村長と思わしき老人の元へ向かつた

何やらペコペコ頭をさげている

あつ

杖で頭を叩かれているぞ

それに何やら怒鳴られているようだ

しばらくすると村長は集会所と思わしき建物に入り込みドアを勢いよく閉めた

ナオヤはしばらくつむじていたが俺の存在を思い出したのかこちらへ向かつてきた

ナオヤ「おう、村長に掛け合つてみたらお前を置いてくれるそ�だ、まあ俺が頼めばこんなもんだ」

蓮斗「そうか、礼を言つ

ナオヤ「なあに、いってことよ」

蓮斗「じゃあちょっと村の人たちに挨拶でもしてくるか

ナオヤ「俺はしばらく家で休ませて貰う、ハードなクエストでクタクタだぜ」

ナオヤはそういうと村にある一番小さな家に入つて行つたさて、やはりまずは村長に挨拶すべきだらう

俺は集会所へ向かった

ドアを開けると受付と老人の2人きりだった

2人が一斉にこちらを見る

蓮斗「ああ、えーと、ナオヤの紹介でこちらでお世話になる蓮斗・  
クル・パーマネントです」

村長「あのハンターを世話するだけで手いっぱいだつていうのに…  
・」

受付「まあまあ」

村長と思わしきオッサンが文句を言い受付の若い男がそれをなだめる  
どうやらあまり歓迎されていないみたいだな  
それもそうか、こいついきなりじや

村長「ワシは村長のオカ・シモじや」

受付「ボクは受付のケン・ハイ・スマッチ、ケンでいいよ  
モンハンの受付といつたら可愛らしい受付嬢じやないのか?  
まあいい

オカ「さつそくだがんたには悪いが腕試しとしてクエストに行つ  
てもうう、これであんたを村に置くかどうか決めさせて貰う」

蓮斗「な、なんだつて!?」

ケン「準備ができたらまた来てね

やれやれ、面倒なことになつたな

まあナオヤをサポートとして連れて行けば問題なくクリアできるだ  
らう

俺は集会所を後にすると武器屋に行つた

武器と防具がないなんてハンター以前の問題だ

蓮斗「こんにちは」

武器屋「おう、新入りか」

蓮斗「はい、蓮斗・クル・パーマネントです」

武器屋「俺はミノ・ムラだ」

蓮斗「ところで武器なんですが・・・

ミノ「おう、どうするんだい?」

蓮斗「それが金がなくて・・・」

ミノ「・・・」

蓮斗「出世払いといふことで貸して貰えませんか?」

ミノ「悪いがそれはできないね、素材がないことには生産できません」「それもそうか、あれだけプレイしたゲームのシステムをすっかり忘れてしまっていた

まいつたな・・・これからクエストだつてのに

ミノ「・・・一応装備一式ならナオヤの住んでいる家にあるぞ」

蓮斗「え? そうなんですか!?」

ミノ「ああ・・・昔この村にいたハンターが使つていた防具がな・・・」

・  
蓮斗「昔いたハンター?」

ミノ「ああ、リモ・リマ・ズーボつていうそれはもう腕のいいハンターだつたんだ」

蓮斗「でも今は・・・」

ミノ「伝説のモンスターとやらに会いに行つてそれつきつけ」

蓮斗「伝説のモンスター・・・」

ミノ「まあ、そういうふうだから気が向いたら使いな」

俺は武器屋を後にした

ナオヤの家に入るとナオヤはベッドの上でいびきをかいていた  
アイテムボックスを覗くとそこには確かに防具が一式揃つていた  
ナオヤがなぜ使わないのかと思ったが、どうやらこれはガンナー用  
防具のようだな

どれ、装備してみるか

ん・・・

なかなかいい着心地だ

防具はガノトース一式

武器はライトボウガンのメイルショットローム、こちらもガノトースだ  
この武器は装填数は少ないもののほぼ全ての弾を使用できる優れものだ

ちなみにナオヤの防具はバトル一式

武器は大剣のボーンブレイド改、採集だけで作れる下位武器だ  
それから俺はアイテムボックスからクエストで使いそうなアイテム  
を一通り入手した

イイ感じだ

さて、もう準備もできただし腕試しとやらにいっちょ行つてみ  
つか

蓮斗「おい、ナオヤ」

ナオヤ「ぶび・・・んに?」

汚い寝顔だ

蓮斗「クエストに付き合つてほしい、集会所に来てくれ」

俺はそういうと家を後にした

後ろからナオヤの何か言う声が聞こえたがシカトした  
俺が集会所についてしばらくするとナオヤが入ってきた

ナオヤ「おい！俺にクエストについて・・・あ、村長こんにちはで  
す」

蓮斗「やつぱ迷惑だつたか?」

ナオヤ「いやそんなことはない、サポートは得意だ」

オカ「それではクエストを指定する

ゴクリ・・・

ナオヤ「まー俺がいればそんじょそこらのモンスターなんて」

オカ「イヤンクック狩猟だ」

ナオヤ「よゆ・・・え?」

ナオヤの顔色が変わる

なんだクックか、まあこの装備なら何とかなるだろ

ナオヤ「いや村長、それはちょっとまだ、ほらこの新米ハンター君  
には早いと思うのですが、だって、いや、え?」

オカ「期待しているぞ」

村長オカはそう言つと集会所から立ち去つた

蓮斗「よし、行くか！」

ナオヤ「え、いやちよつとまでよ、クックだぞ?」

蓮斗「何か問題でも?」

ナオヤ「お前何も分かつてないな!あのな・・・」

ケン「頑張つてきてね」

蓮斗「おうー!」

ナオヤ「え、ちよまつ」

「うして俺たちは初クエストに出発した

## 怪鳥VSクルモジャハンターズ（前書き）

実質5話目？

蓮斗の名前が変わっている疑惑がありますがその理由は後ほど

## 怪鳥VSクルモジヤハンターズ

蓮斗「やつてきましたまた密林！」

俺は美しい緑と青に挟まれたスタート地点で叫んだ  
これから自分の身に起きることを考えると自然とテンションも上がる  
あれだけ大好きなゲームの中に入つて実際にハンター生活ができる  
なんて！

ナオヤ「おい！早くしねーと応急薬全部貰うぞー！」

蓮斗「悪い、待ってくれ」

俺はそう言つと応急薬と携帯食料をもらつた

ナオヤ「密林のことなら任せろ、俺はあの村で一番詳しいぞ」「  
そりやそうだ、ハンターがあんただけだからな

俺はそのセリフをぐつと抑え込むとエリア4に向かつた

ナオヤ「おい！どこへ行く！」

蓮斗「クックは開始直後にエリア4で待つのがセオリーだろ」「

ナオヤ「え？お前何言つて……」

俺はエリア4へ向かつた

うーん、絶景だな

透き通るほど美しいブルーの海にサラサラの砂浜

そして気が遠くなるような水平線、PICOの画面で見るのとはわけが  
違う

それから地面から噴き出る煙・・・ん？

ナオヤ「気をつけろ！……」

蓮斗「わっ！」

いきなりでかい声を出すな馬鹿

ナオヤ「あの煙の下にはヤオザミといふ小型モンスターが潜んでい  
る、小型だとつて油断はするな、地面からの奇襲にうつかり引つ  
かかると相当な深手を負うハメになるぞ、俺も引っかかったことが  
あるがそのときは死にかけた・・・陸にでてきてからも油断はでき

ない、奴の移動スピードはそこいらの小型モンスターとはわけが違う、かなりのスピードに加え手数も多くてしつこさも兼ね備えている・・

・強敵だぜ

俺はボウガンをリロードし通常弾レベル2を装填した  
そして砂煙の近くを踏み鳴らした

ナオヤー おい！お前人の話聞いてんのか！！」

砂中からハサミが飛び出した

俺はボウガンを構えると弾を撃ち込んだ

思わず反動で墨

蓮斗「」

俺が立ち上るとそこには全身を砂から出したヤオザミの姿があった  
デカイ・・・

只有性慾才佔據了大半的時間——這就是為什麼

思わず目をつむる

ナノヤ・ハヤヤ ああああああああああああああああああああ

背後からの悲鳴に思わず目を見開く

振り向くとそこにはヤオサミに追いかけられているナオヤがいた

俺は荒れてボクがこの世間をあきらめざつと種付こな

蓮斗「まあまあまあまあ。」

ヤマハミカ倒れる

卷之三

それからナオヤがボーンブレイドをヤオザミに振り下ろす

弾かる

・・・ゼウスのヤオガ///を倒したよひだ

ナオヤ「やつた…ひょ…ヤオザミ倒してやつた！見た！？今の…

？俺の一撃を！？」

凄いはしゃぎょうだ

まるでヤオザミを始めて倒したかのよつな

きつと後輩ハンターにいい所を見せられて嬉しいんだらつ  
さつそく剥ぎ取らせて貰おう

意外とハンターってハードなんだな

俺はそんなことを思いながらヤオザミから剥ぎ取った素材を眺めて  
いた

ナオヤ「それにして今の一撃さ！見たよな…あの俺の…ん？」

ナオヤの話が中断される

辺りが急に暗くなつたのだ

蓮斗「何だ？」

俺は上を向いた

そこにいたのは

ナオヤ「い・・・いいいいイヤンクック！！！」

すっかり忘れていたぜ！今回のメインはこいつだ！

俺は走つてクックから距離をとつた

ナオヤ「おい！逃げんのか！」

蓮斗「俺はガンナーだ！近距離は頼んだ！氣を引いてくれ！」

ナオヤ「え」

ばふうん

イヤンクックが着陸する

生で見ると凄い迫力だ、これが竜…

キエエエエエエエエ

クックの雄たけびがエリア4に響き渡る

ナオヤ「びえ…」

思わずキャンプに逃げ出すナオヤの背中にクックの突進が炸裂する  
キエー！

ナオヤ「ぶわあああああ

蓮斗「ナオヤ！」

俺はすかさずボウガンを構え弾を連射する

蓮斗一喰らえ！貫通弾を！」

ノルマ・アッシュ・エリス

卷之三

卷之三

ナオア「二の野郎！今さら！」

剣を振りかぶり溜め動作に入つたナオヤにクックの尻尾回しが炸裂

十一

数メートル吹っ飛ばされたナオヤは身動き1つしなかつた

## 蓮斗「ナオヤ！」

ノア・エリザベス

キニ

息をつく間もなくクツクがこちらへ向かって突進してくる

魏氏傳の母・タヒラ

間一髪だ・・・あんなのになつたらナオヤのーの舞だぜ

二二二

おお！？

ケツケが廻奮したよ／＼に翼をはた／＼かせる

しれぬ怒り、悲憤、てやうが

## 火の球を吐き出す

たかがンナリの俺には届かないし関係なし

蓮シの勝負・・・貰つた!

俺はさらに貫通弾を顔面に打ち込み続けた



ギ H . . . .

すると起毛止が二たケツケは足を弓もありながら黙出した

蓮シ・これは・・・・!「

「逃げたが、今は逃げた

卷之三

! ?

そんなナオヤを見たツクツクは最後の悪あがきとでもいうようにナ

オヤに炎を吐きかけ突進してハーブボをかました

力不<sup>セ</sup>ヤ ひ未<sup>シ</sup>・・・

ノーブル・モード

「斗陣」

俺は風圧で怯んだ

蓮斗「しまつた！」

俺がナオヤに気を取られて、こなつちに逃げられてしまった

あと一歩だつたつてのこ・・・

おもいしゃ

確かケツケの巣に6番たったな

後は、このことを絶対に忘れないで急需にた

卷之三

ヒリア6に近づくにつれ大きないびきが聞こえてきた

どうやらクックは寝ているようだな

早くしないと

アイツが来る前・・・じやなくてクツクが回復する前に

自然とエリア6に向かう足が速くなる

エリザベスはケンタッキー州のアーヴィングで寝ていた

よく自分のいびきで目が覚めないなコイツ

こちらへんかな

俺がクツクの前でボウガンを構えたその時だつた  
オフ「三三は俺のバレ3二任せろ」

ナオヤ「ここは俺のレバ川3に任せろ!」

蓮斗「…………頬もござ」

中華書局影印

H H H H #

## クックが雄たけびを上げる

ナホドのハジラヌ所掌がワツワの頃同様、左近の配属布達

力不<sub>レ</sub>ひ<sub>レ</sub>

俺は慌ててボウガンを構えたが遅かった

クッケはナオヤに突進した

第一回 撃食の山の事  
第一回 撃食の山の事

俺は必死に貫通弾を撃ち込んだ

死んでくれ！ 脣をここに力を向け！ セメで快くしてくれ！

目と口を見開いたナオヤ

虚しく空を突き抜けてゆく貫通弾

山の野の花

その時だつた

突如2つの人影が現れナオヤとクックの間に立ちはだかった  
そして1人がクックの突進をガードした

1人がクックの頭にハンマーを叩きつけた

キエ・・・キエエエエエ・・・

断末魔を上げ倒れ込むクック

倒した・・・のか？

俺とナオヤの前に立ちふさがる2人の人影  
こいつらは・・・一体！？

## 江戸川コナン（前書き）

かの有名な名探偵江戸川コナンは名を名乗る際とひそかに小説家の名前を組み合わせたそつなくわいな筆者である。

ナオヤ「う・・・」

蓮斗「大丈夫か?」

俺はキャンプでナオヤの手当てをしていた  
クエストは無事クリアしたが腕試し的にはどうなのだろうか

俺は振り返った

そこにいるのは2人の男

片方は見るからにデブでもう片方は小太りだ

デブはババコンガ装備一式にイカリハンマー

小太りはイーオス装備一式に片手剣のデッドドリイポイズンを装備している

装備からして俺らよりは多少出来るハンターのようだ

デブ「どうやらギルドの連絡が遅れてクエストが重複してしまったらしいな」

小太り「すまないことをしたよ」

蓮斗「いや助かつた、礼を言つ」

複雑な心境だが今は礼を言つておこう

デブ「オレはアッシ・ルテデ・ラハ」

小太り「ボクはベア・イン・ハムレット」

そういうと二人は俺たちを見た

蓮斗「俺は蓮斗・クル・パー・マネント、こいつはナオヤ・スネ・ジヤングルーネ」

ベア「ボクたちはホワイト・ビジョンから来たんだ」

聞いたことのある名だ

確か貿易が盛んなデカイ街だ

蓮斗「俺たちはマスク村だ」

アッシ「ほう、マスク村か! オレたちの街の隣じゃないか!」

ベア「隣と言つても一番近いだけでかなり距離はあるけどね」

蓮斗「そうか、ところで報酬だが・・・」

アツシ「ああ、お前たちにやるよ、俺たちは何もやつちやないからな」

蓮斗「そうか、すまない」

ベア「謝るのはボクたちのほうさ、邪魔して悪かつたね」

そういうと2人は船に乗りホワイト・ピジョンへと帰つて行つた  
街か・・・いずれ行くことになりそうだ

ナオヤ「ふん・・・気に入らん奴らだ」

目覚めていたのか

ナオヤ「俺の獲物を横取りしやがって、街だかなんだか知らんが偉そうに」

偉そうなのはお前だ

蓮斗「さあ、俺らも帰ろう」

マスク村へと帰還した俺は報酬と素材を受け取り滞在を認められた  
オカ「まさかクックを倒せるとは、これからもよろしく頼むよ」  
ケン「行きたいクエストがあつたらいつでもきてくれよなー」  
そういうえばアイテム屋についてなかつたな  
ガンナーは弾が命だからクエスト後には毎回調達しにいかないと  
俺はアイテム屋を訪れた

青年「チャオ！今ならアイテム10%割引中アル！」

やたらとテンションの高いこの男がこの店の店主らしいな

蓮斗「蓮斗・クル・パー・マネントです、この村に滞在することになつたんによろしく」

青年「おー、僕はカン・チャン！よろしくアル！」

蓮斗「じゃあ、通常弾とそれから・・・」

俺はアイテムを調達すると家へ行つた

ナオヤ「おう、次は俺のクエストに付き合つてもいいぜ、明朝出發だ」

蓮斗「わかつた」

ナオヤの武器を見るとボーンブレイド改がボーンスラッシュナーに強化されていた

武器から推測するにおそらく明日はリオレウスだな  
まったく勝てる気がしない

正直行きたくないがこちらが付き合わせたのだからそっぽこくまい  
俺はさつさと疲れを癒し明日に備えることにし、寝た

ナオヤ「閃光玉よし、けむり玉よし、あとは罠か、えーと・・・」  
俺はナオヤの独り言で田を覚ました

最高の夜明けだが最悪の田覚めだ

蓮斗「よそよそしいな」

ナオヤ「そりやそつだ！今日は飛竜狩猟だぜー！」

やつぱりな

蓮斗「そうか、まあ俺は準備できるからこいつでもオッケーだぜ」  
ナオヤ「こやし玉をやめて薬草に・・・」

聞いちやいない

結局ナオヤの準備が終わつたのは毎近くだつた

集会所で昼寝をしていた俺はひきつった顔のナオヤに起された

蓮斗「ほんとに行くのか？リオレウス」

ナオヤ「当たり前だ、あいつを倒してこそ一人前のハンターだろ」

昨日の一件で自信をつけてしまつたらしい

オカ「よーく考え方、飛竜じやぞ！？」

ナオヤ「大丈夫ですよ、何せイヤンクックを倒したんですからー！」

昨日の助つ人の話はケンには話したが村長は知らないのだ

そもそもクックとレウスじやわけが違つけどな

ナオヤ「行くぞー！」

ケン「蓮斗、ちょっと」

蓮斗「ん？」

ケン「さすがにリオレウスはまだ早いと思うからそれなりの処置は  
しついたよ

村長は必死にナオヤを止めようとしていたがナオヤはそれを振り切り出発した  
俺も後を追う

ケン「行つてらつしゃい」

オカ「ああ・・・」

俺は辺りを見回した

何度も言つようだが相変わらずの絶景だ

森丘ステージなんて今まで腐るほど見てきたがやはり実際に田の当

たりにすると格別だ

頭上を覆う木を通して降り注ぐ木漏れ日さえ身に染み・・・

ナオヤ「おい！早くしねーと応急薬全部貰うぞ！」

蓮斗「悪い、待ってくれ」

俺はアイテムを受け取るとボウガンに弾を装填した

ナオヤ「よっこらせ」

蓮斗「その火に生肉おいても肉は焼けないぞ」

ナオヤ「！？」

キャンプを後にした俺はマップを取り出した

蓮斗「とりあえずエリアーで待つか

ナオヤ「お前変なことに詳しいな」

俺らはエリアーへと向かうこととした

エリアーへいくとランポスがいた

ナオヤ「い、いくぜ！」

明らかに腰が引けている

蓮斗「こんな奴相手にしてないでさつあと行くぞ」

ナオヤ「てえい！！」

ズバッ

キヤエー

ランポスが吹き飛ぶ

ナオヤ「・・・やつた！！！」

気持ちの持ち方って大切なんだな

俺はこの一件でそれを学んだ

エリアーにつくとナオヤが駆け出した

そしてがつつくよつにキノコを集め始めた

ナオヤ「特産キノコ！」

蓮斗「おいおい

ナオヤ「ふん、モンスターの素材を取るだけがハンターじゃないんだぜ」

まあその通りだが

キノコのような特產品を持ち帰ればギルドから直々の報酬が貰えるし

蓮斗「じゃあ俺は先に行つて・・・」

ナオヤ「ぴぎやああああああああああ

振り返るとそこには刃物を持った小人とアイルーに運ばれるナオヤの姿があった

ち・・・チャチャブー！！

キノコに擬態していたのか！

こいつのヤバさはモンハンをやつたことのあるやつなら誰もが知っているだろう

俺はチャチャブーに気づかれる前に急いでエリア9へと移動した

蓮斗「ふう・・・いてつ」

背後から何者かにどつかれた俺は尻もちをついた

蓮斗「何だ！？」

慌てて振り返るとそこには俺の世界の猫と比べるとやや大きめの黒猫だった

こいつは・・・メラルーか！

・・・ん？

物を盗む憎たらしい奴だが近くで見るとなかなか可愛いじゃないか  
大きくてクリクリした愛くるしい瞳にふさふさの毛並み、それに・・

つてそんなことを考えている場合じゃない！

俺は痛む心を押さえながらその場にいたメラルーたちに弾丸を乱射した

蓮斗「ふう・・・

安心しかけたそのときだつた

何かが羽ばたく音がだんだんと近づいてくる

そしてそれは俺の頭上で止まつた

来たか！

俺は距離をとるとボウガンを構えた

どすうん

現れたのはリオレウス

蓮斗「な・・・」

あまりの迫力に思わず身体が固まる

イヤンクックなんて比じやない

俺はこのとき初めて本気で命の危機を感じた

勝てるわけがない！

逃げようと駆け出した俺の背後で雄たけびが聞こえた

ギヤオース！

蓮斗「ひつ・・・」

振り返るとリオレウスがこちらに突進してくるのが目に入った  
速いデカイ！まるで戦車だ！戦車みたことないけど！

俺は目に入った小さな穴にとっさに飛び込んだ

ここまで入つてこれないだろう

やつがエリア移動するのを待つか・・・

ナオヤ「待たせたな！！」

遠くのほうで最も聞きたくない声が耳に飛び込んだ

蓮斗「あ・・・」

ナオヤ「飛竜だか火竜だか知らんが今の俺・・・」

どうやらレウスに気づいたらしい

ナオヤ「びえ・・・」

きっと腰を抜かしているに違いない

俺は穴から飛び出すと持ってきていた角笛を吹いた  
クックの一件で学習した俺は角笛を持参していた

案の定腰を抜かしているナオヤに突進しかけていたレウスはこちら

を向いた

蓮斗「逃げろ！」

ナオヤ「け・・・毛・・・」

クソ・・・！

俺はもう一度角笛を吹いた

レウスは完全にこちらに向き直った  
その口元にはうつすらと炎が見える  
終わった・・・

俺は覚悟した

レウスが口を開け首をのけ反らす

その時だつた

辺りが閃光につつまれた

アツシ「まつたく世話の焼ける」

ベア「こつちだ！」

突如現れたアツシとベアに促されるまま俺たちはエリアーを脱出した

アツシ「まつたく・・・」

ベア「いくなんでもまだレウスは卑すげるでしょ、ボクたちでさえ  
倒したことないのに」

蓮斗「ああ、全くその通りだ」

俺はエリアーの池でパンツを洗つているナオヤに囁くばせをした

アツシ「受付のケンとやらに感謝するんだな」

蓮斗「ケンに？」

ベア「昨日ボクたちに伝書鳩が飛んできてね、君たちのサポートを  
頼まれたんだ」

ケンがクエスト前にいっていたそれなりの処置つてのはこれのことか

蓮斗「すまない、また助けられたな」

アツシ「気にするな、それじゃ

ベア「帰ろうか」

蓮斗「え？」

アッシ「おいおい、まさかお前・・・」

そうだそのまさかだ

俺はあのリオレウスを眼前にし死にかけた  
しかしそれでも諦めきれなかつた

蓮斗「俺は諦めない、君たちは帰つていい」

ベア「な、なんだつて・・・？」

蓮斗「俺は一刻も早く一人前のハンターにならなければならぬんだ」

リモ・リマ・ズーボ、彼が探し求めていた伝説のモンスターとやら  
に元の世界に戻る鍵がある、俺はそう確信していた  
アッシ「好きにしな、俺たちは命が惜しいんでね」  
そういうと2人はエリア10を去つて行つた

ナオヤ「お、おう・・・」

ナオヤがこちらへ寄つてきたがいつもの威勢がない

蓮斗「さつきまでの自信はどうした？」

ナオヤ「・・・」

蓮斗「いくぞ」

ナオヤ「え？」

蓮斗「イヤンクックのときだつてそうだ、俺たち2人が力を合わせ  
れば倒せないモンスターなんていないさ」

ナオヤ「無茶だ・・・」

蓮斗「このまま帰つてどうする?笑い者だぜ」

ナオヤ「・・・」

蓮斗「そうか、お前はその程度のハン・・・」

ナオヤ「しようがねえ、お前だけじゃ心配だからな」

蓮斗「よしー作戦を考えよう!」

ナオヤ「ふん、それならもう考えてある」

蓮斗「ほづ」

ナオヤ「まず奴に気づかれないうちに落とし穴を仕掛ける、それから閃光玉、そしてリンクチだ!」

偉そうに言つた割には普通だが黙つていよう

いた・・・レウスだ！

蓮斗「よし、落とし穴を頼む！」

ナオヤ一あれ?俺か仕掛けの?お前行けよ  
やまつそしつきたか

しょうがない

俺はレウスの後ろから氣づかれないように近づき落とし穴を仕掛けた

俺はカスヤの腰を抱き寄せ

ナオヤが思いつきり叫ぶ

するところからに気づいたレウスは雄たけびを上げながら突進してきた

ハーブスケン

俺はそれを余裕で眺めていた

六〇

俺の眼前で落とし穴にはまるレウス  
慌てて抜刀しようと土半身ジサで暴

辺りをつつむ閃光

## 動きを止めるレウス

ナオヤ「よつーーー！」

ナオヤの溜めレベル3がレウスの脳天に直撃する

ギヤノノノノス  
ノウスの悲痛のソラヅガ木靈する

いける！

俺はそう確信し徹甲榴弾を装填した

おきの弾た

「いつで・・・キメる!」

俺が構えてスコープを覗いた時だつた

レウスが落とし穴から飛び上ると勢いよく着地し絶叫した

ギヨオオオオオオオオ

どうやら怒り状態になつたらしい

至近距離にいたナオヤはあまりの轟音に耳を塞ぐ

それからレウスはナオヤに突進をかまし吹き飛ばした

ナオヤ「んぎ」

そして高く舞い上がる

俺は慌ててレウスの真下へ逃げ込む

蓮斗「大丈夫か！？」

ナオヤ「溜まんねえぜ・・・こいつは俺のハンター魂をどこまでも  
刺激してくれる！」

あ、壊れた

ナオヤ「こいやああああ！」

そういうとナオヤは走り出した

そんなナオヤにスポットライトが当たる

ナオヤ「え？」

ナオヤが驚きの表情で頭上を見上げたと同時にブレスが直撃した  
黒焦げになり吹き飛ぶナオヤ

慌てて現れ焦げた塊を運ぶアイル

俺はそれを唖然として見ていた

しかしそれもつかの間、レウスが着地をすると俺に向き直り突進を  
してきた

は・・・速い！

こんなの避けられ・・・

蓮斗「うぱああああああああ

俺は勢いよく吹き飛ばされた

レウスを見ると俺を睨みつけ威嚇をしているようだつた  
まずい・・・回復を・・・

俺がポーチに手を突っ込むよりも早くレウスの尻尾が飛んできた

蓮斗「ぐう

勢いよく吹き飛ばされた俺の意識はもはや朦朧としていた  
俺もここまでか・・・

ナオヤ「蓮斗！いま行ぶつ」

復帰したナオヤが走りよるがレウスの尻尾に弾き飛ばされ俺の隣へ  
と倒れ込んだ

そしてもう一度尻尾が飛んできた

俺は目を閉じた

そして覚悟を決めた

ナオヤ「もげつ

・・・・・

・・・ん？

目を開けるとそこにはレウスの尻尾につぶされたナオヤの姿があった  
ただしその尻尾は根元あたりから切断されていた  
遠くには尻尾を切断され痛みにもがくレウスの姿  
目の前には見覚えのある人影があつた  
ベア「やつぱり見捨てられないよな」

アッシ「ギルドへの言い訳は何て言おつか」

蓮斗「お・・・お前ら・・・

ベアがポーチから取り出した粉を飲み干す  
すると不思議と俺とナオヤにも力が沸き起つた  
ナオヤ「4人パーティーだ、行けるな？」

それはお前のセリフじゃない

俺は怒り狂っているレウスを見据えると深呼吸をし

ボウガンを構えた

蓮斗「いくぜ！！！」

w e l c o m e   t o   N S J (前書き)

訳・遠い昔、はるか彼方の銀河系で・・・

それからはあつという間だった

先ほどまでの苦戦が嘘のようにスムーズな戦闘だった

俺が毒弾を撃ち込み体力を削り

ベアが立ち回りでレウスを翻弄し

アツシがレウスをスタンさせ

レウスがダウンするどどこからともなく現れたナオヤが加わり総攻撃

人数が4人だと高難度クエストもここまで楽になるものなんだな

俺は足元に倒れているレウスを眺めながら思った

一進一退の攻防の末

俺たちはついにあのリオレウスを倒したのだ

アツシ「見なおしだぜ、新米かと思いまくるな」

ナオヤ「お前もな」

ここに妙な友情が芽生えたようだ

ベア「さて、素材も剥ぎ取ったことだし、行くか」

アツシ「そうだな、次の街へと」

蓮斗「うん？」

アツシは遠い目をして言った

アツシ「今回の件で俺たちは街のギルドを追放されるだろう、だからあの街を出るのさ」

ナオヤ「どんまい」

蓮斗「いや待てよ、何で追放なんて・・・」

ベア「無断で他の村のクエストに参加してタダで済むほどボクらの

ギルドは甘くないのぞ」

ナオヤ「NSJへ来いよ

アツシ「え？」

ナオヤ「ナオヤ（ノ）・スネ（ソ）・ジヤングルーネ（コ）、俺の

名を冠したギルドだ

ベア「つまり君たちの村へ来いと？」

蓮斗「そりやいいや、お前たちなら大歓迎だ」

ナオヤ「NSJはまだ正式なギルドじゃないし、メンバーも2人だがいざれデカくなる」

そんなのがあつたなん……って、え？

メンバーが2人？

それって……

蓮斗「おいナオヤそのメンバ……」

アッシ「礼を言つ」

ベア「御言葉に甘えることになりそうだ」

ちょまつ

ナオヤ「ようこそ、NSJへ」

そして俺たち4人はマスク村へと帰還した

ナオヤ「おい！なあ！見ろよこれ！ふひつ！」  
・・・うるせーな

朝っぱらに寝ている俺を叩き起こしたナオヤが持っていたのはレッズ  
ドウイニング

先日のリオレスの素材を使って強化した大剣だ

今日になつてやつと完成したらしい

ナオヤ「ついに俺も竜素材を使った武器を持ってるようにな・・・お前  
が来てからいいことだらけだぜ！」

妙にテンションの高いナオヤにイラつきながらも俺は起床した  
ベア「よう」

外に出るとアイテム屋のカンと親しげに話しているベアの姿があつた  
アッシ「おつ」

俺に続いて家から出てきたアッシは集会所へと向かった

この2人も大分この村になじんできたようだ

ナオヤ「といづことでな、火が弱点のモンスター狩獵へ行こうと思  
う」

後ろから耳障りな声が聞こえてくる

蓮斗「…？」

ナオヤ「フルフルなんてどうだ？」

連斗「いやだよ」

ナオヤ「おう、サンキュー……え？」

連斗「寒い」

ナオヤ「ぬあんでだよ！お前らのクエストに散々付き合つたろ！」  
レウスを倒してから俺たちは防具や武器を強化するために様々なクエストへ行っていた

ハンターとしてのレベルもこの短期間で数段にアップしだらう  
ちなみにナオヤは勝手に付いてきたと言つたほうがしつくりくる  
ナオヤ「俺達つて仲間じゃねーの！？協力するだろ普通！？」  
・・・つたく、しようがねーな

蓮斗「ベアとアッシの2人にも聞いてみる」

あの2人ならきっと断るだろう、今更フルフルなんて  
アッシ「いいぜ、改に進化したイカリハンマーの威力を思い知らせてやる」

ベア「ボクもちょっと強化したプリンセスレイピアを使ってみたかつたんだ」  
ええ・・・

ナオヤ「おし、じゃあ今夜出発だ！」

まあガンナーでのフルフルはかなり楽なことだしまあいいか  
ナオヤ「次の防具はフルフルにしようかな・・・うひ」

俺は装備を整えると夜に備えて睡眠を取ることにした  
フルフルの弱点は火で部位破壊が出来るのは頭と身体で・・・  
そんなことを考へていてうちに俺は心地よい暗闇に包まれた

・・・あ・・・くあ・・・白亜！

俺は目を覚ました

ここは・・・？

辺りを見回すとそこには見慣れた光景だった

ここは俺の通う白鳩高校・・・?

そして俺の席だ

男「白亜！起きろ！お前の番だぞ！」

そうだ、俺の名前は白亜蓮斗

どこかで見たことのあるような男が前方で怒鳴つている

連斗「え？ここは？何だ？」

俺は辺りを見回した

横の席を見るとそこには男が座っていた

男「4 5 6 ページ 1 2 3 行目の英訳だ」

蓮斗「お・・・おつ」

俺は促されるままにそのページのその行を読んだ

連斗「えー、A long time ago in a  
galaxy far, far away . . .」

教師「正解だ、次」

ここは・・・?

そうだ・・・俺は白亜連斗・・・

男「大丈夫か？気分悪そうだが」

蓮斗「ああ、大丈夫だ」

何か大切なことを忘れている気がする

しかしそれが何なのは思ひ出せない

男「そういえば、モンハンのアップデートだけじさ」

モンハン・・・アップデート・・・?

そうだ、俺はマスク村で・・・

俺の名前は・・・

ナオヤ「蓮斗・クル・パー・マメント！」

ナオヤの怒鳴り声で目を覚ました

外を見るとあたりはうす暗くなっていた

連斗「夢・・・？」

ナオヤ「死んだよつに躍りやがって、そろそろ出発だ」

連斗「あ、ああ」

さつきの夢は俺の生活していた世界だ

俺はこの世界に来て元の世界の記憶がジョジョに薄れてしまつているらしい

白亜連斗・・・か

すっかりとつねに名乗った名前、連斗・クル・パーマネントになりきつていたぜ

見知らぬ地で本名を出すのに気が乗らなかつたから名乗つた名前だが・・・

我ながらナイスネーミングだ

だが、これからは毎日日記でも付けるよつにするか昔の記憶を忘れないよつに

ナオヤ「おい！」

連斗「わかつてる、今行く」

俺は集会所へ向かつた

ナオヤ「びいっくし！！！」

ナオヤの顔面が鼻水にまみれる

アツシ「ふん、この程度の寒さで音をあげるな」

お前はいいよな、温かそうで

ベア「ほら、ホットドリンクは一人1つずつな」

俺はベアから赤いドロドロとした液体が入ったビンを受けとる

いかにもますそうだ

しかしこの寒さだ、それは言つてられない

俺は一気に飲み干す

連斗「・・・『ぶつ』

俺は思わずその液体を吐き出した

か・・・辛い・・・

ナオヤ「び・・・げ・・・ぱつ」

あまりの辛さにナオヤは足をもつらせそのままエリアーへとつながる坂を転がり落ちて行つた

ナオヤに続き俺たちもエリアーへと向かつ

連斗「ほお・・・

そこには堂々とそびえたつ壮大な雪山

広大な夜空を覆う美しいオーロラ

澄んだ色の湖という何とも幻想的な光景が広がつていた

アツシ「どうした？」

思わず見とれて足を止めていた俺にアツシが声をかける

連斗「あ、いや、何でもない」

ベア「あーあーナオヤのやつ」

ベアの視線を追うとそこには草食モンスターのガウシカをいじめ倒しているナオヤの姿があった

ナオヤ「こいつの素材は中々高く売れそうだぜ」

ナオヤがガウシカを蹴り飛ばす

連斗「おいていくぞ」

ナオヤ「おいおい、少しくらい素材集めたつていいぶつ」

こちらを向いていたナオヤの背後からガウシカが突進をかます

ナオヤ「いつてえな！このクソぶつ」

ナオヤが起き上がるうとするともう1頭のガウシカが突進をかます

そしてナオヤが起き上がるうとすると・・・

ナオヤ「びえ・・・ごめんなしゃい！」

そう言つてナオヤは走り出した

それを追うガウシカ

緑の煙に包まれるナオヤ

どうやらモドリ玉でキャンプに逃げ出しそうだ

俺たち3人はナオヤを置いて先にエリア4へと進んだ

連斗「うつ、何て寒さだ」

ベア「この寒さには慣れないね」

アツシ「ホットドリンクの効果が切れる前に肉を焼いておくか」

ベア「そうだね」

そういうと2人は肉焼きセットを取り出し肉を焼きだした

ベア「ふんふんふん それつ」

ベアが掲げた肉は一見美味そうだが生焼けだった

ベア「くそ、これも慣れないよ」

そういうとアツシをみた

ウルトラ上手に焼けました

アツシが掲げたその肉は何とも絶妙な焼け具合だった

そのジューシーな見た目に加え滴る肉汁に香ばしい匂い

それだけじゃない、絶妙な焦げ具合に湧きあがる蒸気

それは全てにおいてパーフェクトだった

ゴクリ・・・

俺とベアのヨダレを飲む音が氷でできた洞窟に木靈する

アツシ「肉に関しては街でも俺の右に出るものはいなかつた」

アッシはそう言つとこんがり肉Gを一気に平らげた

アッシ「げえっふ」

俺はうずきだした食欲を抑えつけながらエリア5を経由しエリア6へと向かつた

連斗「うぐ」

頂上付近の雪の積もつたこのエリアは他のエリアとは比べ物にならないくらい寒かつた

頬を撫でる冷風もやはや心地のいいものではなく痛みさえ感じじるベア「さて、戦いやすいこのエリアでフルフルを待つか」

アッシ「採集でもして暇を潰すとするか」

そういうとベアは採集を始めアッシはピッケルをとりだし採掘始めた

連斗「暇だ」

その時だつた

一瞬だが風が強くなりエリアの空気が変わつた

・・・来る！

アッシとベアもそれを感じ取つたらしく武器を構える

エリアの中心部に影が現れる

俺はボウガンに麻痺弾を込めると構えた

そして降り立つ

赤いフルフル

連斗「え？」

着地と同時にアッシのレベル3スタンプがフルフル亞種の胴体を直撃した

コオオオオオオオ

雄たけびを上げるフルフル

アッシ「ぶひつ」

アッシはたまらず耳を押さえ倒れ込んだ

ベア「危ない！」

ベアの叫びも虚しくフルフルはその身体に青い電気を帯び帶電した

アツシ「ぶでええええええ」

アツシは吹き飛ばされ崖の一歩手前で静止した  
しかし地面が雪と足場が悪いため態勢を崩す

ベア「アツシを頼む！」

そういうとベアはフルフルに近づきお得意の立ち回りでフルフルを  
翻弄し始めた

連斗「大丈夫か！」

アツシ「落ちる落ちる落ちる落ちる！」

俺はアツシに急いで駆け寄ると手を差し伸べた

連斗「んお！？」

アツシの想定外の重さにあやうくバランスを崩し2人もとも落下  
するところだった

少しは瘦せろ

アツシ「ぐう・・・直撃だぜ・・・怒り状態だつたら危なかつた」

アツシはそういうと回復薬を飲み再び武器を構えた

アツシ「亞種とは聞いていなかつたが俺の武器は水でアイツの弱点  
だ、敵じゃない！」

アツシはそういうトイカリハンマーを構えフルフルのもとへ駆けて  
行つた

連斗「サポートは任せろ！」

俺はそう叫び麻痺弾を発射した

そろそろだ

・・・あと1発で麻痺るな

ベアに向かつてダイブするフルフル

それをガードしのけ反るベア

そこにはかさず攻撃を仕掛けるアツシ

さすがだ、ナイスコンビネーション

するとフルフルは再び身体に電気を帯び始めた

連斗「ここだ！」

俺は狙いを定め麻痺弾を発射する

ナオヤ「いやーハチミツ採集してグレーート作つてたら遅れびつ！？」

突如現れたナオヤに麻痺弾がクリティカルヒットする

ナオヤ「ばにつ！？じびれるつ」

麻痺状態になつたナオヤのもとに帶電しながらダイブをかますフルフル

そして現れるアイルー

運ばれてゆくナオヤ

・・・俺、悪くないよな

俺が再び麻痺弾を発射すると今度こそフルフルにヒットした

連斗「今だ！」

麻痺状態になつたフルフルにアッシとベアが総攻撃を加える

水冷弾を打ちたいところだが亞種とは聞いていなかつたので持つていない

ここはやはりお得意の貫通弾の出番だぜ

ゴオオオオオオオオオオオオ

連斗「うおつ！」

意気揚々とボウガンを構えた俺の耳をつんざくような悲鳴がエリア

6に鳴り響く

怒り状態か！

フルフルの口に青白い電気が見える

今度はブレスか・・・！

あいにくフルフルは俺の正面にいた

しかし奴のブレスは3方向に分かれため少し横にずれれば当たらんのだ

俺はフルフルのブレスの軌道を避けると再びボウガンを構えた

ベア「どりや！」

ベアがフルフルの背後から斬りかかる

そしてブレスが発射されるが俺の横をかすめていく

しかしおおきの腹に潰されたベアはフルフルの眼前へ吹き飛ばされた

ベア「いってえ」

起き上がるベアの背後からは再びフルフルが首を持ち上げる姿が見えた

アッシ「ベア！」

アッシが叫んだがベアの反応よりもブレスの速度のほうが速かつた

ベア「ぶびれえ」

転がりながら吹き飛ぶベア

まずい・・・！

後一撃喰らつたらキヤンプ行きだ！

俺は角笛を取り出そうとするが寒さで上手く指が動かない

連斗「くそつ・・・！」

するとナオヤが死んだあたりに何かが落ちているのが目に入った

連斗「アッシ！」

俺はその近くにいたアッシの名を叫びそれを指さした

アッシはそれが何かを悟るとフルフルへ向かって思いきり投げ飛ばした

アッシ「びいいいいふつ」

それは再びベアに向かつてブレスを吐こうと首をもたげたフルフルの脳天へ直撃した

茶色い煙が辺りを包みこむ

フルフルは視覚が衰えている代わりに聴覚と嗅覚が発達しているんだ  
このこやし玉は効くだろう！

案の定フルフルはよろよろとした足取りでふらつくと翼を広げエリ

ア6を急いで後にした

するとどこからともなく

ナオヤ「俺、再び参じよ・・・くつせえ！…！」

アッシ「大丈夫か？」

ベア「なんとか・・・」

ナオヤ「どうした？ランゴスタに刺されて麻痺ったか？ん？そういう

や！」には雪山だからランバースタはいなのはず、あれでもむさつき・・・

「連斗「とにかく、ベアは無事だったことだし、せつせと奴を追うぞ」

俺はそういうとヒリアフへと向かつた

そこには数頭のブランゴとフルフルがいた

アッシ「ベアは俺のアシストを頼む、連斗は俺たちの援護射撃、ナ

オヤはブランゴを」

ナオヤ「なんでだよ！」

ベア「フルフル亞種の弱点は水だからナオヤには火が弱点のブラン

ゴを頼んだのや」

ナオヤ「なーる！」

そういうとナオヤはブランゴの元へ駆けて行った

こいつら・・・完全にナオヤの扱い方を心得ていやがる

俺はフルフルからある程度距離をとると弾をチヨイスした

散弾や拡散もいいが複数プレイのときは仲間の邪魔になりがちだ

しかし部位破壊といつたらやはり散弾だろう

手数は減るがベアとアッシの隙をついてフルフルに攻撃するとするか

ベアの毒属性武器がダメージを余分に与えている分アリだろう

ベア「こっちだっ」

ベアがフルフルを引きつける

アッシ「罷OKだ！」

アッシがジビレ罷をしかけると俺たちはフルフルをそこへ誘導した

ギョエツ

かかつた！

アッシとベアが一斉攻撃をしかける

ここで散弾を撃つわけにもいかない俺はフルフルに駆け寄った

連斗「ぱああああ」

ボウガンで殴りつける

ダメージは極微量だが何もしないで見ているよりはマシだ

連斗「まつ！」

殴りまくる

そろそろ罠が壊れるころだ！

アツシ「帶電するぞ！離れる！」

アツシの合図で俺とベアはフルフルから離れた  
罠が壊れる

しかしフルフルは身動き一つとらない

ん・・・？

・・・これは・・・瀕死だ！

連斗「よっし！一気に叩け！」

再び総攻撃を開始しようと駆け寄った瞬間にフルフルは飛び立て  
しまった

だが巣は分かっている

エリア3だ

ナオヤ「ブランゴの奴・・・俺の相手ではなびつ」

後ろからのナオヤの声が途切れた

その代わりに何やら荒い息遣いが聞こえてくる

連斗「ん？」

振り返るとそこには今にも俺たちに突進しようと身構えるドスファ  
ンゴの姿があつた

ベア「いたのかい」

アツシ「ナオヤ・・・お、俺たちは一端引く・・・この強敵はお前  
に任せた・・・ぐつ」

ここで新事実が発覚だ

アツシはなかなかの演技派

ナオヤ「おうよ！－」

俺たちはナオヤをエリア7に置いておくとエリア3へとダッシュした

アツシ「レベル3で一気にケリをつける、お前らは手を出すな」

そういうとアツシは1人でエリア3へと入って行った

ベア「じゃあボクらは採集でもしますか」

連斗「おいおい、大丈夫なのか？」

ベア「あいつ結構無茶するところあるけど相手は瀕死だし  
まあ確かに瀕死なら飛竜でも1人でいけるか

ベア「そうは言つても」

連斗「エリア5はなにもねーな」

俺たちは笑いながらエリア3へ向かつた

アッシ「おう、帰るぞ」

エリア3に入ると息の根を止められたフルフルと何やらドテカイ球  
体を持つているアッシの姿があつた

ベア「それ好きだな」

アッシ「ああ、極上の味だぜ」

どうやらアッシが抱えているのは飛竜の卵のようだ  
体系を裏切らないキャラをしてやがる

ベア「さて、ボクらもさつさと剥ぎ取つて帰ろつか」

帰りの気球でクエスト情報を見ると報酬が3分の1に減っていた

ケン「おつかれさん」

ナオヤ「おう」

連斗「おいおい、亞種だなんて聞いてねーぞ」

ケン「ん?何のこと?」

アツシ「クエストを間違えるなんて受付が一番しちゃいけない」と  
だろう

ベア「お陰で散々だつたよ」

ケン「いや、クエストを選んだのはナオヤだよ」

俺たちが振り返ると急いで集会所を出していくナオヤの姿があつた  
それと入れ替わりに駆け込んでくる村長

オカ「だつだいべんじや！…！」

アツシ「トイレ行けよ」

ベア「下品な奴だな」

連斗「次は何のクエに…？」

オカ「ちがああああああああああう！…！」

俺たちはオカ村長の怒鳴り声に驚いて一瞬硬直する

ケン「村長落ち着いて、どうしたんですか?」

オカ「ハア…ハア…」

一体なんだ

オカ「大変じや！…！」

わかつたよ

オカ「ち・・・超巨大モンスター・シェンガオレンが街へ向かってい  
るんじや…」

連斗「へえ、どのくらい」「カイんだろ」

アツシ「砦蟹と言われることもあるくらいだから相当な大きさなん  
だろうな」

ベア「モスラとビッグちが大…」

オカ「聞けえええええええええ！」

このオツサンテンション高いな

オカ「緊急なんじや！街は先日古龍に襲撃されたばかりで復興途中なんじや！」

連斗「初耳だぜ！街のミュージカルのチケットが取れないのはそのせいか！」

ベア「始まりの唄は名曲だね、ボクも好き」

アツシ「俺的には歌姫の衣装にも注目してほし……」

オカ「でえええええええええええええい！！！」

オツサンぶつとばすか？

ケン「落ち着いてください、文字数稼ぎですか？」

オカ「つまりじゃ、シェン迎撃にいくハンターが街にはいないんじや！」

アツシ「そりやまずいな」

ベア「ボクたちも街の復興に行けって？」

連斗「悪いが俺はゴメンだぜ」

オカ「つひええええええええええええええ！」

俺は拳を振り上げたが次の瞬間にはオツサンに対する怒りは消し飛ばされた

オカ「シェン撃退依頼がこの村に！つまり前たちに来たんじやよ

！！」

連斗「な、何だつてえ————？！」

アツシ「出発は明朝だ、それまでに装備を整えておけ」

ベア「超大型モンスターなんて初めてだよ、撃退できるかな？」

連斗「装備の分はアイテムで補えば何とかなるぞ」

アツシ「そうだな、みんな爆弾と調合素材を忘れるな

ナオヤ「シェンなんて俺の罠で・・・」

ベア「効かないよ」

ナオヤ「なら閃光玉で・・・」

ベア「効かないよ」

ナオヤ「じゃあ、こやし……」

ベア「効かないよ」

ナオヤ「そんな馬鹿な……奴は神か?」

ナオヤが膝から崩れ落ち震え始める

連斗「怖いのか?」

ナオヤ「武者ぶるいだよ……」

そして夜は更けていった

i t - s n o t a f o r t b u t I t h a t p r o t e c t

もうなんか本編よりサブタイトル考えるほうが楽

それでは第12話「君を護るのは誰ではなく僕だ」を、ご覧ください

i t - s n o t a f o r t b u t I t h a t p r o t e c t

連斗「うお！」

俺は思わずよろめいた

今俺がいるのは砦

街へ侵入しようとする大型モンスターを防ぐために建てられた建物だ  
後ろに見えるのは超大型モンスター・ションガオレン  
こいつが歩くたびに地面が揺れて気を抜くとこけてしまいそうだ  
まるで数秒ごとに地震が起きているかのような感じと言えば伝わる  
だろうか

それにしてもここは辺りを見回しても皆山だらけで何もない  
まったく殺風景でつまらない土地だ

少しは密林や森丘を見習つてほし・・・

ナオヤ「早くしろ！応急薬全部貰うぞー！」

連斗「今行く」

俺はそういうとHリーアーを後にしキャンプへと入った  
キャンプにくればさすがに揺れは来ないようだ

連斗「あれ？俺の携帯食料は？」

ナオヤ「知るか」

連斗「ベア？」

ベア「ボクのはほら」

連斗「アツシ・・・」

アツシ「遅いのが悪い、それにお前はガンナーなんだからいらんだ

る」

このテブ

俺は残った支給品を取るとエリアーへと向かった

シェンはまだエリアーに到着していないようで地響きだけが響いて  
いる

アッシ「取りあえず爆弾を設置して奴が来たら爆破、それから総攻

**撃だ**」

ベア「はいよ」

そういうと俺たちはシェンが通るであろう一本道のド真ん中に爆弾を次々と設置した

それから俺たちはナオヤを見る

ナオヤ「安心しろ、自爆するとでも思ったか?」

俺たち3人は同時に頷いた

ナオヤ「・・・・・」

その時だつた

遠くから何かが飛んでくる

あ・・・あれは!

ブレスだ!

俺はナオヤを思い切り突き飛ばすと地面に伏せた

ナオヤ「のがつ」

連斗「ぐつ」

B L A M M M M M M M M

背後で爆発音がする

ベア「爆弾が!」

アッシ「くそ!来るぞ!」

誰かアメコミみたいな擬音につつこめよ

ブレスが飛んできた方向をみるとシェンガオレンが霧の中から姿を現した

間近でみるとそのあまりの大きさ、そして迫力に思わずひるんでもいそうになる

俺の隣でもぞもぞとナオヤが立ち上がる

ナオヤ「ぐ・・・いきなりブレスとはやつてくれんじゃねえか」

ナオヤとアッシが溜め攻撃の準備をする

俺は大量に持ってきた弾に邪魔されながらも田標から距離をとるとスコープを覗いた

俺だつて武器を強化したんだぜ

金だけで楽に強化できるのがボウガンのいいところだ  
ちなみに俺はロングバレルよりもサイレンサー派だ

ナオヤ「よつつっ！」

アツシ「びいいいいいいつふつ！！」

エリア<sup>2</sup>に突入したシェンガオレンに2人の溜め<sup>3</sup>が炸裂！  
するはずだったがそうはいかなかつた

2人の近くにシェンの足が着かれその振動で2人は態勢を崩したのだ  
そこに再びシェンの足が降つてくる

ナオヤ「んぎ」

アツシ「あぶらつ」

吹き飛ぶ2人

ベア「だつ大丈夫か！？」

足踏みとはいえ超大型モンスターゆえダメージは相当なものだ

ナオヤ「んびりんびりんび」

ナオヤは勢いよく起きあがると応急薬を飲みまくつていた

アツシ「くそ・・・俺を揺らすとは・・・やるじゃねえか」

ベア「タイミング良く攻撃するんだ！」

ベアはヒットアンドアウェイを繰り返しうまい具合に足踏みを避け  
ながら攻撃をしている

さすがといったところか

俺は拡散弾を取り出した

ふつ・・・

俺につままれた拡散弾が口差しの輝きを反射し煌めく

ついにこいつが使える時が来たか

その名の通り敵に当たると弾が拡散するためにパーティプレイには  
向いていない弾だ

しかし全弾の中でも威力はトップクラス

大型モンスターのクエストには重宝する弾だぜ

俺はリロードをするとスコープを覗き慎重に狙いを定め

撃ち込んだ

連斗「ファツキン！」

シェンが被つている大型モンスターの頭蓋骨に弾が突き刺さる

そして拡散

連斗「つしゃ！」

ガツツポーズ

この調子なら今回も楽勝だな

そんなことを考えていた時だつた

神はそう上手く事を運んでくれないものだ

ナオヤ「へつへー！いくぜよー！」

頭上から声が響く

見るとエリア頭上を横断している石橋にナオヤが乗っているではな  
いか

アッシ「何やつてんだ！」

ごもつともな質問です

ナオヤ「何つて剥ぎ取るのよー！」いつの素材は高いぜえー！」

ナオヤはそういうと両手を広げダイブした

連斗「あつ」

ナオヤ「もげつ」

地面に叩きつけられるナオヤ

そこにシェンのハサミが飛んでくる

ベア「うおつ」

ナオヤとそれを助けに入つたベアが共に吹き飛ばされる  
現れるアイル

運ばれるナオヤ

ベア「んぐ・・・忍耐の種を食べていなかつたら死んでいたよ・・・

」  
ベアはそういうとキヤンプへ退散した

アッシ「そろそろエリア移動だ、いくぞ！」

連斗「俺は背後からもう少し攻撃しとく、先に行ってくれ」

アッシ「頼んだ」

そういうと俺は拡散弾を撃ちまくつた  
よく見ると殻が少し壊れている気がする  
そして俺は俺の攻撃に気づいていないかのように歩き続けるシェン  
を尻目にエリア2を後にした

ここがエリア3か

エリア2と全く見た目には違ひが見つかん  
ナオヤ「不覚だつたぜ・・・この対巨龍爆弾でアイツの甲殻を吹き  
飛ばしてやろうとしたんだが・・・」  
うそつけ

シェンを見ると足が数本赤くなっていた

ベア「部位破壊までもう少しだ！連斗は殻を頼む！」

連斗「おう」

俺はそういうと貫通弾を装填した

やっぱ巨大モンスターには貫通弾だぜ

連斗「ぱああああああ！！」

俺が撃ち出す弾が次々とシェンを貫通していく

連斗「まつ！まつ！まつ！」

今日の調子はベリーグッドだ！

アッシとナオヤも攻撃のタイミングを掴んだらしく上手く足を  
避けている

俺も弾をリロードすると殻に撃ちまくつた

奴の弱点は殻の中だからこの貫通弾は効いているはずだ

足元ではひたすら斬りつける剣士が3人

ここには弱点を攻撃するガンナー

その中心にはただただ歩き続ける巨大な蟹

その光景を前に俺の頭にふと疑問がよぎった

俺たちの使っている武器じやシェンにダメージを与えられていない  
んじゃないかな？

その詫問にこいつはびくともしないで歩き続けている

俺たちじゃ・・・

いやダメだ！

信じるんだ！

自分を！

アッシとベアを！

連斗「ぱあああああまつーー！」

俺はシェンに向かつて渾身の一撃を放った

ギギイ

爆発するように弾け飛ぶ巨大モンスターの頭蓋骨

崩れ落ちるシェン

アッシ「ダウンするぞ！避ける！」

ベア「おうー！」

ナオヤ「ぶげっ」

このダウンは俺たちにとって転機だった  
攻撃にまったく動じず歩き続けるシェンに不安を覚え始めていた俺たちのやる気が再び蘇った

ナオヤ「一気に叩くぞ！このチャンスを見逃すな！」

俺たちはひたすら攻撃を加えた

しかしシェンは何事もなかつたかのように立ち上がるとそのままHリア3を後にした

ナオヤ「いいぞこの調子だ！奴は俺たちNSの敵じゃない！」  
1人わめくナオヤを残し俺たちはキャンプへと戻った

ベア「これは？」

ベアがドデカイボウガンの弾のようなものを拾い上げる

連斗「バリスタの弾だ、Hリア5の高台で使うんだ」

アッシ「これもか？」

アッシがデカくて黒い球体を持ち上げる

連斗「それもエリア5の高台にある大砲で使うんだ、卵じゃねーぞ」

俺の冗談にベアは笑つたがアッシは鼻を鳴らすと大砲の弾を投げ出しエリア4へと向かつた

俺もそれに続く

背後では小さな爆発音とナオヤの悲鳴が聞こえた

what do pure white wing think? (前書き)

純白の翼は何を想つのか

w h a t   d o   p u r e   w h i t e   w i n g   t h i n k?

アツシ「ここのが正念場だ、気を抜くな」

アツシはそういうとイカリハンマーを構え駆け出した

ナオヤ「何かアイツがリーダーみたいなノリになつてないか? 大丈夫か?」

ベア「大丈夫だよ」

ベアもアツシの後に続く

ナオヤがこちらを向いたので何か言われる前に俺も駆け出しポジションについた

ベア「そろそろだ! 気をつけて!」

ベアはそういうとシェンから距離を取った

シェンの足を見るとそのすべてが赤く変色していた

ナオヤが足を切り上げ

アツシがスタンプをかます

そして俺が拡散弾を撃ち込む

ンギギィィ

シェンが立ち上がった

が次の瞬間足が元の青い色に戻りその巨体が降つてきた

アツシ「ぶひつ」

近くにいたアツシが衝撃で吹き飛ぶ

距離を取っていたベアはすかさず近寄ると攻撃をしかける

ナオヤは・・・?

俺は辺りを見回す

よかつた、担架の上で元気そうだ

俺は遠のくナオヤから視線を外すと再びシェンに弾を撃ち込んだ

連斗「ファツキン!」

アツシ「チキン!」

ベア「ロツキン!」

この3人の総攻撃は相当効いたはずだ  
しかしシェンは再び立ち上がり再び何もなかつたかのように歩き出す  
俺たちは言い知れぬ不安に包まれながらもその背中を見送った

キャンプへ戻るとナオヤがベッドに座りうつむいていた

連斗「大丈夫か？」

ナオヤ「…………」

何も答えない

レウスのときも落ち込んでいたが今回はそれの比ではないようだ  
いつも調子をこいて虚勢を張つてゐるが、それは自分の弱さを隠す  
ためなのかもしれない

本当は人一倍責任感が強く、弱い自分に我慢ができないんだ  
虚勢を張つてゐるのはその弱さを人に悟られたくないからじやない  
自分で認めたくないからなんだ

初の超大型モンスターにして責任重大のこのクエストでの2死でついに限界がきたのだろう

連斗「ナオヤ…………」

俺はナオヤの肩に手を添える

ナオヤ「ぶあつくしつ！！」

俺の顔面に飛び散る鼻水

ナオヤ「いやあ、クシャミが出そうで出ないって嫌な感じ」

そう言つて笑うナオヤにボディブローをかますと俺はエリア5へと向かう入口をぐぐつた

エリア5へ入ると大砲の弾を抱えたアッシとバリスタを撃ち込むべ

アの姿があつた

アッシ「ほおおおおくつ！」

アッシが弾を大砲に詰め込み点火する

BOMB！

発射の衝撃に思わずアッシが尻もちをつく

弾は弧を描きながらエリアに突入したシオンの脳天へ直撃した

一瞬たじろぐシェン

アツシ「いくぜーお前ら俺にバリスタ当てんよ！」

ナオヤはそう言うと高台から飛び降りシェンへ向かってダッシュした

俺はもう1台のバリスタに弾を込めると照準を定めた

ベア「ボウガンって難しいな、よくこんなのが使えるよ」

連斗「慣れさ」

それから俺たちは数十発のバリスタをシェンに打ち込んだ  
途中シェンがダウンし遠くからアツシの歓声が聞こえてきた

ベア「これでー！」

連斗「ラストオー！」

BANG！BANG！

ベアと俺の最後の弾がシェンに当たり弾ける

ベア「いくかー！」

連斗「おうー！」

ナオヤ「ちくしょう！イーオスに邪魔されて大砲の弾運べねえ！」

防具の所々が焦げ付いたナオヤが合流し俺たち3人はアツシの元へ  
ダッシュした

アツシ「できれば砦に到着する前に倒したい！」

ナオヤ「まかせろー！」

シェンはそろそろ俺たちの存在を気にし始めたのか頻繁にハサミを  
振るようになってきた

しかし今更そんなものに当たるはずもなく俺たちは華麗に回避する

そしてスキを見て射撃、斬撃

弾ける弾に切り裂かれる甲殻

この完璧なリズムのハーモニーを崩さなければ勝てる！

そう思つた時だつた

俺たちの中に不協和音がいた

アツシ「くるぞー！」

再びシェンのハサミが振り子のように振られる

ナオヤ「んぎ」

なぜかシェンの真下で大剣を研いでいたナオヤに直撃する  
吹き飛ばされ痙攣するナオヤ

連斗「ナオヤ！」

ナオヤ「びえ・・・」

再びシェンのハサミが振りあげられる

連斗「ナオヤ！・・・」

俺の叫びが届いたのか我に返つたナオヤは間一髪のところで緑の煙  
に包まれ姿を消した

そしてシェンは砦に到着した

ベア「マズイよ、もう砥石の数が残り少ない」

アツシ「俺のスタミナも長くは持たないだろう」

連斗「持久戦に持ち込まれたら負け・・・か

そうだ、こいつだ

俺は頭上にあるドデカイ槍を見上げた

連斗「俺はこの撃龍槍を使つ！」

ベア「任せた！」

俺はそういうと高台についているハシゴを上り始めた  
するとシェンが立ち上がり動きを止めた

今だ！チャンス！

俺は急いでハシゴを上ると位置を確認した

シェンを見るとボロボロの大型モンスターの頭蓋骨が口を開いてこ  
ちらを向いている

・・・ヤバい！

とつさに地面に伏せる

そして発射されるブレス

かなりの衝撃だ

外壁が崩れ落ち砦がきしむ音が聞こえる

もう一度こんなものを撃ち込まれたら・・・

俺は急いで撃龍槍のスイッチの前へ向かうと全力で叩いた

カンツ

乾いた音が崩れかけた外壁に反響する

ギュルルルルルルルル

そして次の瞬間数本のドテカイ槍がシェンを貫いた

ギエエエ

ダウンするシェン

連斗「今だ！」

俺が叫ぶまでもなく下の二人はシェンを斬りつけていた

キュルル

ゆっくりと元の位置へと収まる槍

この槍は威力はかなりのものだが連射することはできない  
もう一度使うにはしばらく時間が経たなければならぬからだ  
再び高台の上に登るには労力が必要なため基本クエストで活躍する  
のは1回きりというのが普通だろう

俺はボウガンに散弾をリロードするとダイブした

持久戦に持ち込まれて困るのは何もアッシとベアだけじゃない

俺もだ

もう残りの弾丸はこの散弾のみだ

アッシ「立ち上がるぞ！」

シェンは立ち上がりハサミを振りあげた

そして狂ったように何度もそれを皆に叩きつける

ベア「止めるんだ！」

俺たちは必死に攻撃をしかけた

しかしシェンはそんなことはまったく気にしないようにひたすら皆  
を攻撃し続ける

辺りは日が沈みかけていた

夕日と共にこの砦も沈んでしまうのか？

俺は脳裏に浮かんだ崩れ落ちる砦の映像を振り払うとひたすら散弾  
を連射した

この速度では連射と言えるかどうか疑問だが

この持久戦で疲れ切った身体が思うように動かず氣を抜いたら弾を打ち出す時のわずかな衝撃ですら尻もちをついてしまいそうだそれはアツシとベアも同じようだった

アツシ「んご・・・！」

スタミナが切れたのかハンマーを振りあげるが高さが足りていなくて足も震えていて今にもダウンしそうだ

ベア「せいせい！」

ベアは一見何ともなさそうだが攻撃が何度も弾かれている恐らく砥石の数が残り少ないため調節しているのだろう

そして俺も・・・

連斗「くるああ！」

最後の弾をシェンに撃ち込んだ  
はあ・・・はあ・・・はあ・・・

この空間には俺たち3人の疲れ切った息遣いとシェンの攻撃によりきしむ砦の音だけが響き渡る

そしてシェンは再び背中の頭蓋骨を砦へ向けた  
頭蓋骨の開かれた口にはうつすらと蒸気が見える

まずい・・・！

あと1撃でも撃たれたら・・・！

とつぞに俺はポーチを見た

空だ

完全に弾が尽きた

アツシを見る

アツシ「ぐ・・・スタミナが・・・」

アツシはそういうと片膝をついた

ハンマー使いにとってのスタミナ切れは死を意味する

ベアを見る

ベア「切れ味が・・・くそ・・・」

ベアも手数の多い片手剣という武器のため砥石が尽きたようだ初めての持久戦に俺たちは完全にしてやられていた

ふと俺は身体中から力が抜け膝から崩れ落ちる

もう・・・ダメだ・・・

俺たちは・・・ここまでようだ・・・

そして俺は地面に倒れ込んだ

シェンがブレスの衝撃に耐えようと足に力を入れたため甲殻種特有のきしむような耳障りな音が辺りに響く

俺はゆっくりと目を閉じた

これが・・・敗北というものか

俺は悟った

・・・・・

その時だった

頭上から声が響く

ナオヤ「またせたな！！」

目を開き声のした方向を見る

逆光でよく見えない

あれは・・・ナオヤ？

するとその人影は指を1本立てるとそれを天に向けて言い放つた

ナオヤ「天を切り裂く孤光から舞い降りし純白のペガサス！俺の名は・・・ナオヤ・スネ・ジャングルーネ！」

カンツ

ナオヤはそういうと撃龍槍をシェンにぶちかました

数本のドデカイ槍が勢いよく突き出しシェンの甲殻を貫き破り破壊する

ギュウルルルルルルル

ギギギエエエエエエエ

バキバキバキバキ・・・

シェンを貫く激龍槍とシェンの崩れ落ちる音だけが崩壊寸前の砦の壁に反響した

シェンが崩れ落ちる衝撃は凄まじく、砦が壊れるのかと心配してしまうほどだった

夕田と共に沈んだのは皆ではなくジョンだった  
そしてしばしの沈黙が訪れた

・・・・・

連斗「倒した・・・のか・・・？」

アッシ「やつた・・・やつたんだ・・・！」

ベア「守りきつたんだ・・・僕らが・・・！」

相当疲れているのか2人は仰向けになり動かない  
俺はよろよろと立ち上がった

連斗「うつ・・・」

しかし身体の節々が痛み立ち上がるのもままならない

連斗「ん？」

そのとき俺に手が差し伸べられた

ナオヤ「立てよ、帰るぞ」

俺はナオヤの手を取り

立ち上がった

連斗「・・・おひ」

person as whom blood is the same (前書き)

血を分かつ者

村へ戻るとオッサンが抱きついてきた

オカ「よおおおおやつてくれたああああ

うわつ

連斗「はは、大変でしたよ、えつとほり、この、はつ・・・離れる！」

突き飛ばされたオッサンはアイテムボックスの角に頭をぶつけてしまうまつた

ん？

受付のほうを見ると見知らぬ長身の男がケンと話をしていた

アッシ「あいつは・・・！」

ベア「何故こんな所に！？」

連斗「ん？ 知り合いか？」

俺の質問に2人が答える前にその男はこちらに気づき近寄ってきた  
男「本件のことについては感謝しています、本来なら私が承るべき  
クエストだったのですが」

全身ギルドナイトスーツ一式に身を包み武器はホーリーセーバーとい  
う何ともキメキメなスタイルだ

連斗「かまわんよ、街はもう大丈夫なのか？」

男「ええ、私が襲撃してきた古龍を討伐しましたので」

ほう

ナオヤ「見ろよショーンの素材！ どんだけ高価なんだよ！ 硬化なだけ  
に高価つ・・・」

テンションの高いナオヤの声がいきなり途絶えた  
振り向くとナオヤは男の顔を見て目と口を見開いていた

ナオヤ「た・・・タカマサ・・・」

男「久しぶりだね、兄さん」

え？え？え？

男「申し遅れました、私はタカマサ・マユ・ジャングルーネ、そこにいるナオヤ・スネ・ジャングルーネの弟です」

俺は思わず絶句する

この男のことは知つてたであらうアッシとベアも2人の関係には驚いているようだつた

アッシ「ギルド直属の精銳ハンター部隊隊長がナオヤと兄弟だと…」

ベア「ナオヤとギルド・ディープヘアーズの凄腕ハンターが…」  
タカマサ「あなたたちの噂は聞いています、なんでもギルドを裏切つたとか？」

タカマサはそういうと笑みを浮かべた

アッシ「なつなんだと！？」

アッシがタカマサに掴みかかる

ベア「ま、まあまあ、事実だし」

そういうベアの顔も引きつっている

ナオヤ「帰れ・・・帰れよ！」

ナオヤがタカマサを見据える

タカマサ「まあまあ、今日は兄さんにとっていい話を持つてきただ」

ナオヤ「聞くつもりはない」

ナオヤはそういうと集会所の出入り口へ向かった

タカマサ「私の部隊に入らないかい？いつまでもこんな小さな村にいるつもりはないでしょ？」「

ナオヤの歩みが止まる

なんだつて？

それはつまり弟の部下になれといふことか？

よくも実の兄にそんなことをぬけぬけど！

タカマサ「気が向いたらいつでも街に来てください、それでは私はこれで」

タカマサはそういうとマスク村を後にした

アッシ「くそつ氣に入らん奴だ」

ベア「しょうがないよ、實際実力あるんだし」

それにしても衝撃の事実だつたな

このナオヤに弟がいたとは

ナオヤを見ると放心状態のようだつた

連斗「おいおい、ナオヤ？」

俺がつつくとナオヤは棒きれのように倒れアイテムボックスの角に  
頭をぶつけ氣絶した

「おほ・・・」

俺はその華やかさに開いた口が塞がらなかつた

俺の名前は白亜連斗こと連斗・クル・パーマネント

街にいる

何故俺が街にいるのかつて?

まあ長くなるが説明してやるう

どうやらナオヤが病気になつたようだからわざわざ街に薬を買ひに  
来たんだ

弟との再会が相当ショックだつたみたいだ

アッシとベアは街には行きたくないというから俺一人で來たつてわけ  
もちろん俺はアイツの薬の為だけに来るようなお人よしじゃない

観光!

その目的が俺の脚を動かした

「すいません、アイテム屋つてどこに・・・

道行く人に尋ね尋ね何とか辿りついた

「ここか・・・デカイな」

俺はマスク村の十倍はあるであろう街のアイテム屋を見回した

こんなどこで薬を探していたら日が暮れちまう

連斗「すいません」

店主らしい男に声をかける

店主「おー何アルか?」

連斗「えーと薬を探しているんですが・・・」

症状を伝えるとその薬はすぐに見つかつた

シン・ヘア・シンドローム

それが奴の病名らしい

俺の世界で言う鬱病のようなものだ

店主「また来てアル!」

俺は薬をポーチにしまってむと深呼吸をした

連斗「さて！」

観光だ！

俺も一応はハンターだし街の集会所とやらをみておくか

その後に歌姫のミュー・ジカルと闘技場だ

俺は着くやいやな勢いよく集会所の扉を開けた

連斗「おお・・・」

集会所はかなり大きくそれに見合った数の人がこいつた返していた  
酒を飲み暴れるハンターもいればクエストの準備をしているハンタ  
ー、ただ会話を楽しんでいるハンターなど様々だ

俺は近くにあつた空席に腰かけるとミルクセーキを注文した  
それからしばらく近くのハンターたちの会話を盗み聞きした  
隠しエリアやら黄金の竜だと無人の城、モンスターの言葉が分か  
るハンターだと話題は尽きない

男「おい！兄ちゃん！」

ん？

後ろで誰かが絡まれているらしい

かかわらないほうがよさそうだ

立ち上がり歩き出した俺の肩が掴まる

痛い

連斗「はい？」

振り向くとそこには濃い顔の小柄なハンターがいた

男「俺が呼んでんだよ、まさかシカトかあ？」

かなり酔っているようだ

相当酒臭い

連斗「臭い息を吹きかかるな」

男「はつはつは！面白いガキだ！」

連斗「どうも！」

再び歩き出そうとした俺の肩が再び掴まる

男「ふざけてんじゃないねえ！この俺を誰だと思つてやがる！」

連斗「知らん」

男「なら教えてやる！俺の名はS・マルコスだ！」

周りの取り巻きが野次を飛ばす

連斗「Sは何の略だ？スネ毛か？」

マルコス「ふざけてんじゃねえ！いい度胸だ！」

取り巻きたちが俺を取り囲む

集会所の人たちはまったく気に留めていないようだ

こんな騒ぎは日常茶飯事なのだろう

連斗「はあ」

俺はため息をつくと取り巻き1の顔面に裏拳を叩きつけると足を払いダウンさせた

そして取り巻き2のパンチを避けるとボディブローをきます

次に後ろからイスで殴ろうとする取り巻き3にワンツーからのアッ

パーで顎を砕く

キマつたぜ

連斗「だてにクエストで鍛えられてねーよ」

振り向いた俺の顔面にマルコスのパンチが炸裂した

連斗「んげ」

吹き飛んだ俺はイスに顔面から突っ込んだ

鼻血が噴き出す

マルコス「なかなかやるじゃねえか！気に入ったぜー！」

連斗「ほりやううも」

痛みでセリフが上手く言えにゃい

連斗「そりやどうも」

クールに言いなおすと俺は立ち上がった

マルコス「まあ座れや！」

促されるままに俺はマルコスの正面へと座った

マルコス「げつへつへ！これだ！」

マルコスが取りだしたのは紙とサイコロだった

連斗「こいつをどうしようつてんだ？」

マルコス「俺と勝負だ！」

ギャンブルか

そんなことをして俺に何の得があるってんだ  
これだから酔っ払いは嫌いなんだ

連斗「断る」

俺はそういうて立ち上がった

マルコス「げつへつへ、こいつが欲しくないのか？」

マルコスはそう言つとポケットから何かを取り出した

・・・薬！

俺は慌ててポーチをまさぐる

・・・ない

俺はイスに座りなおす

マルコス「話がわかるじやねえか

観光に来たはずなのに何故こんなことに

マルコス「お前が買つたらこの薬を返してやろう、だが負けたら・・・

負けたら・・・?

マルコス「お前の装備を貰う」

連斗「何だつて！？」

俺は思わず立ち上がる

マルコス「ギルドを追い出されておまけに装備を没収されちまつて

な

しそうがないがナオヤには苦しかんでもうつか

そんな考えが頭をよぎる

それもいいがこいつの悔しがる顔をみたい

その気持ちのほうが勝つた

連斗「上等だ」

ギャンブルは好かないがやつてやるぜ

俺はサイコロをひつたくるといかさまがないか調べた  
マルコス「お先にどうぞ、ぐへへ

連斗「ふん」

俺はサイコロを振る

・・・3

紙の上に置かれた俺の駒を3つ先のマスへと進める

マルコス「次は俺だあ！」

マルコスは勢いよくサイコロを振った

・・・5

マルコス「やつたぜ！・・・げえ！」

5つ先のマスには文字が書かれていた

連斗「1回休みか、ふん」

勝負はかなり長引いた

が結局俺の圧勝だった

顔をひきつらせ薬を差し出すマルコス

一体こいつは何がしたかったんだ

連斗「恨むならお前の運の悪さと、ギルドを恨むんだな」

マルコス「くそお・・・タカマサあ・・・

ん？今何で？

連斗「ディープ・ヘアーズ・・・」

俺がその名を口にするとマルコスは顔色を変えて怒鳴った

マルコス「その名を口にするんじゃないねえ！」

そして隣にあつた酒瓶を掴むとラップ飲みを始めた

やれやれ

俺も街には一度と来たくなりそうだぜ

俺は受付へ行くとドリンク代をマルコスにつけてから集会所、それから街を後にした

road where each walk (前書き)

それぞれの歩む道

road where each walk

連斗「ほら、飲め」

俺はナオヤに薬を差し出す

しかしナオヤは布団をかぶり言つことを効かない  
つたく

俺がどんだけ苦労してこの薬を持ち帰ったと思つてんだ  
いつまでもこいつの世話をしているわけにはいかない

俺はアツシにナオヤを任せるとベアとクエストに出かけることにした  
本当は村長あたりに頼みたいんだが仕方がない

村長は病気ではないが寝込んでいるからな  
頭に怪我をして

俺は装備を整えると集会所へ向かつた

そこにはベアがいた

俺をみたベアは待っていましたと言わんばかりに立ち上がる  
ベア「付き合つて貰つて悪いね」

連斗「いいんだ、行こうか」

ケン「おーい！忘れもんだよ！」

ケンが急いで走つてくる

連斗「おう、悪いな」

ベア「シビレ罠か、捕獲するのか？」

連斗「そのほうがいいだろ？」

ベア「悪いね」

俺とベアはアイテムを確認するとバサルモス狩猟のために火山へと  
向かつた

アツシ「ナオヤ、そんなんじゃいつまでたっても・・・」

ナオヤ「ん？」

ナオヤはこそぞと辺りを見回した

ナオヤ「連斗は？」

アッシ「クエストに出かけたが」

ナオヤ「そうかそうか」

安心したナオヤは起き上がると薬を飲み始めた

アッシ「なんだ、元気なのかよ」

ナオヤ「まあな、アイツの留守中に勝手に素材使っちゃったから怒

られそうで」

アッシ「・・・・・」

ナオヤ「それよりよ、俺たちはどうするんだ？」

アッシ「とーうと？」

ナオヤ「クエストだよ、暇なら付き合ってくれよ

アッシ「何のだ？」

ナオヤ「ダイミョウザザミなんてどうだ？」

アッシ「また蟹かよ・・・」

ナオヤ「防具作りたいんだよ、いいだろ？なつ？なつ？なつ？なつ？」

しつこい野郎だ

アッシ「しようがねえ分かつたよ

ナオヤ「ひょつぼつ！じや集会所で待ってるぜ！」

そう言つとナオヤはベッドから飛び出し集会所へと駆け出した

アッシ「元気すぎんだろ・・・」

俺はそう呟くと集会所へと向かった

crab  
rock-n-roll (前書き)

カニロック

連斗「あつ・・・」

額からしたたる汗をぬぐう  
俺は今火山のキャンプにいる

それなりの暑さには覚悟していたがまさかここまでとは・・・  
あまりの蒸し暑さに思わず防具を脱いじまいそうだ

ベア「おーい、早くしないとペイントボール貰うぞー！」

連斗「やるよ」

俺はそういうと支給品ボックスの中からクーラーボックスを取り出した

ベア「これがボクたちの生命線だからね、切らせないようこしなきや」

2人一緒に一気にそれを飲み干す

連斗「カーッ！」

渴いたノドを冷たい液体が洪水のように流れていく

ベア「ホットドリンクよりも全然うまいね」

連斗「まったくだ

さて今回はバサルモスだつたな

連斗「んじゃ、エリアフへいきますか」

ベア「りょーかい」

俺たちはエリアフへと向かつた

ナオヤ「やべ！」

アッシ「なんだ？」

ナオヤ「クーラーボックス忘れた！」

こいつは何しに来たんだ

アッシ「砂漠に行きたって言つたのはお前だろ？」

ナオヤ「おつ

アツシ「さ、行くぞ」

ナオヤ「え！？くれないの！？」

アツシ「甘えるな」

ナオヤ「そんな！死んじゃう！いいじゃん！なつ？なつ？なつ？」  
「しうがねえ・・・」

アツシ「ほらよ」

ナオヤ「サンキュー！んびつんびつんびつ」

アツシ「んじや俺は先行ってるぞ」

俺はそういうとエリア2へと続いている坂を駆け下りた

後ろからはナオヤの叫び声が聞こえた

ナオヤ「あれ！？俺の携帯食料がねえ！」

連斗「クーラードリンク飲んでも蒸し暑いって何んだけだよ」

俺たちはエリア7へと到着したところだつた

エリア7の奥には不自然に地面から飛び出した岩

ベア「エリア1と2以外じゃあの擬態も何の意味があるのや！」

連斗「まつたくだ」

俺たちは地下へ足音を響かせないようにゆっくりとその岩へと近寄つた

そしてジェスチャーで合図をしながら爆弾をセットした

連斗（爆破オーケー）

親指を立てる

ベア（行くよ）

ベアがピースサインをする

ベアは距離とるとそれをわざと拾っていた石のひを爆弾へ向かつて投げ飛ばした

ドッカーン！！

エリア7に大タル爆弾の爆発音が響き渡る

ギヤーオーン！

爆発と同時に地面からなんとも不格好な竜が飛び出た

連斗「じゃあ麻痺らせるからよひじく」

ベア「頼むぜ、そらつ！」

勢いよく斬り込んだベアは勢いよく弾かれた

ベア「なつ！？硬つ！」

のけ反るベアにバサルの尻尾回しがクリティカルヒットする

ベア「ぽけつ」

吹き飛ぶベア

それに駆け寄る俺

連斗「おつおい、大丈夫か？」

ベア「なんとかね、ここまで硬さとは思ってなかつたよ」

さすがは岩竜と言つたところか

ガンナーの俺には関係ないが

俺たちはバサルの突進を避けると再び攻撃態勢に入つた

アッシ「とりあえず、このエリアで待つか」

ナオヤ「えー熱いじゃん嫌だ」

あ？

アッシ「じゃあ探してこいや、見つかったらペイントボールをつけろ」

ナオヤ「いやいじよ、砂漠はキノコないから暇だしくつ・・・

アッシ「クーラードリンクあげたつてのに態度デカイな」

ナオヤ「はあ！？お前だつて俺の携・・・」

そこまで言つたナオヤは次の瞬間宙に浮いていた

そしてナオヤのいた位置には一角獣の頭蓋骨が地中から顔を出して  
いた

アッシ「きたか！」

ナオヤ「もげつ」

顔面から地面に落下するナオヤ

何とか生きているようだ

俺はハンマーを構えるとダイニコウザザミで突進した

アッシ「みいいいとつ！」

振りかざされたハサミを回避すると後ろへと回り込み甲殻を叩く

アッシ「部位破壊ならまかせろ！」

ナオヤ「おう！まかせた！」

アッシ「てめえ！回復ケチんな！」

俺はキャンプへと走り出すナオヤの背中に向かって怒鳴った

thank you for the mean (謹書也)

「うれしかったです」

ベア「うわっ」

のけ反るベア

連斗「気をつける！」

ベア「いちいち弾かれてんじゃやつてらんないよー。」

嘆くベアにバサルの巨体が突っ込む

ベア「おあつ」

それをギリギリで回避するベア

連斗「そろそろ麻痺るぞ！」

ベア「オーケー！」

それからベアが6回弾かれたのち俺はバサルを麻痺らせた

ベア「ほらほらほらつ！」

ベアが弾かれながらも何度も斬りかかる

俺は弾を貫通弾へと切り替えるとバサルの腹を集中攻撃した

ここを壊せばベアも弾かれずに攻撃できるはずだ

連斗「ぱあああまつ！」

俺の連射が効いたのかバサルの腹にヒビが入る

連斗「ベア！今だ！」

俺の合図でベアが腹に斬りかかる

そして弾け飛ぶバサルの腹

岩のような皮膚の下にあるもう一つの赤い皮膚が露出する  
しかし破壊と同時にバサルは雄たけびをあげた

ゴオオオオ

そのあまりの轟音に耳を塞ぐ俺とベア

思わず口を閉じてしまっていた俺はおそるおそるバサルの様子をう

かがう

するどちゅうどバサルが首を振り下ろすところだった

その口に炎を湛えて

そして飛んでくる火球

ベア「もんつ・・・！」

間一髪のところでガードする片手剣

連斗「ぐるあああああああ

直撃をくらうライトボウガン

連斗「うつおつあつ」

地面を転がるように吹き飛ばされた俺は溶岩の1歩手前で静止した

連斗「あ、あぶねえ・・・」

ベア「間一髪だね」

俺は震える手で回復薬を取り出すと何かそれを飲みほし立ち上がった

連斗「この野ろ・・・」

バサルのいた場所には砂煙と共に地面へと消えていく尻尾があった

ナオヤ「いくぜえ！」

ダイミョウの顔面に斬り込むナオヤ

アッシ「馬鹿！もつと慎重にいけ！」

ナオヤ「なあに、だいじょうべつ

ハサミにどつかれ尻もちをつくナオヤ

言わんこっちゃない

俺はナオヤが回復に行つている間に順調にダメージを与え

殻を第1段階破壊することに成功していた

ナオヤ「いつてえ・・・」

アッシ「気をつけ・・・ん？」

ダイミョウの姿が見当たらない

ナオヤ「わかつてゐよ、つたく

そう言つて立ち上がつたナオヤに影が射す

アッシ「あ、ふない！」

俺が叫んだときにはすでにダイミョウはナオヤをペチャんこに押し

潰し

地中からはアイルーが現れていた

うかつだった・・・

振りむいたダイミョウの口からは白い泡が吹かれていた

怒り状態か

そりや死ぬわ

高速で走りよるダイミョウの軌道から外れると俺は再びハンマーを構えた

アツシ「ぐつ」

その時ふと身体に異常を感じた俺は片膝をつく  
足が震えて立つていることすらままならない  
ダイミョウはそんな俺に容赦しなかつた

圧縮された水のブレスが俺を直撃する

アツシ「あつぶつらつ」

転がりながら吹き飛んだ俺にすかさずにじみよるダイミョウ

俺はよろよろと立ち上ると震える手でモドリ玉を足元の砂へと叩  
きつけた

俺を包む緑の煙

空を切り裂くダイミョウのハサミ

ナオヤ「どうした? 死んだのか?」

当たり前だがキャンプにはナオヤがいた

アツシ「そんなわけあるか」

俺はポーチからこんがり肉を取り出すと一気にたいらげた

アツシ「・・・よし! 行くぞ!」

俺は震えの収まつた脚で再びエリア2へと走り出した

連斗「爆弾あるか?」

ベア「1つだけ」

連斗「んじゃ頼んだ」

俺たちはバサルを追いエリア6へと移動していく

それにしてもここは他エリアと比べるとさらに熱い

したたる汗が地面に水たまりをつくりそうな勢いだ  
早くケリを付けないと干からびちまいそうだぜ

バカアン！

ゲヤオス！

俺はベアの爆弾で地上に再び現れたバサルモスに照準を合わせると通常弾を連射した

連斗 - くるはあ!

リズム戦は進行していった

ベア「へいへい！」

バサルの腹を切りつけるベア

その時だつた

バサルが雄たけびを上げると翼を広げ態勢を低くした

三  
四

ベア「ぐえつげえつねえ」

新編江戸川乱歩全集

脚本「あひ地獄」

俺がそう叫んだとき

**毒ガスには要注意だな**

連斗「まつまつまつー」

バサルが突進で近寄るとそれを回避し距離を取る

ガンナーの敵じゃないぜ

俺がそんな作業を1・3回ほど繰り返したのにベアが復帰した

ベア「悪いね！今度はそつはいかない！」

ベアはそう言うとバサルに斬りかかる

そして尻尾振りを回避すると腹にもぐりこみ斬りつける

その時だった

ギャアアアアン

バサルが雄だけびと共に倒れ込みそのまま動かなくなつた

連斗「あれ？」

ベア「あら？」

・・・ そうだ忘れてた

バサルは瀕死の兆候が見られないんだつたつけ

連斗「悪い、捕獲できなかつたな」

俺はそう言つとポーチの中のシビレ罠とベアを交互に見つめた

ベア「まあ、クリアできただけいいとしましょ」

俺たちはバサルの素材を剥ぎ取るとピッケルを取り出し火山を巡った

ナオヤ「もうだめ・・・

ナオヤはそういうと倒れ込んだ

アツシ「しつかりしろ！」

そういう俺も結構限界が近かつた

ペイントボールをつけ忘れたためにダイミョウを見失い俺たちは完全に迷子状態だった

ナオヤ「何でこんな熱いエリアばつか探すんだよ！」

ナオヤが愚痴る

アツシ「じゃあ他のエリアに行くか？」

俺たちはエリア7へと入った

ダイミョウの移動するエリアはだいたい1・2・5のどれかなんだ

からそつちを回っていたほうが効率がいいだろ

そんな都合よくここにダイミョウがいるわけ

ナオヤ「いた！」

いたな、うん

ナオヤ「うおらああああ

ナオヤがダイミョウに突進し武器を振り下ろす

ギョエ

いきなりの攻撃に食事中のダイミョウは驚いたようだつた  
そしてダイミョウはこちらの存在に気付いたようでハサミを振りあげると横走りで突進してきた

アツシ「ふおつ

俺はそれを回避しハンマーを構える

ナオヤ「いくぜええ！」

ナオヤはそう言つと溜め行動に入った

それを見たダイミョウは態勢を固め動かなくなる  
殻にこもつてもハンマーの俺には関係ないぜ！

俺は殻を集中攻撃した

ナオヤ「よつつつ！！」

ナオヤの溜め3がダイミョウに破裂する

これはさすがのダイミョウもきいたらしくハサミを振りあげると白い泡を噴き出した

怒り状態か

アツシ「気をつけろ！」

ナオヤ「わかつてゐわ！」

ダイミョウは再び宙に飛び上るとナオヤめがけて振つてきた

ナオヤ「同じ手を食らつかよ！」

ナオヤはそう言つとガード態勢をとり身を固めた

しかし怒り状態のダイミョウのプレスを防げるはずがなくあっけなく吹き飛ばされた

ナオヤ「んぎ」

アツシ「ナオヤ！」

よかつた

生きているようだ

アツシ「回復するんだ！」

ナオヤ「もうない・・・」

な、なんだと！？

アツシ「くそが・・・間に合えー！」

俺は死に物狂いで走りダイミョウとナオヤの間に入るとハンマーを構えた

ナオヤをみると完全にビビりきっているようだった

アツシ「じつとして、後は俺がやる」

俺はハサミを振りあげたダイミョウの側面に回り込むとハンマーを

叩きつけた

そして再び宙に飛び上がったダイミョウのプレスを避けるとすかさず背後に走り寄り溜めろをお見舞いする

弾け飛ぶ一角獣の頭蓋骨

俺はその破片を身に受けながら溜めろ回転からのホームランファイ

ツシューと共に叫んだ

アツシ「これで・・・満腹だ！！！」<sup>マイニッショ</sup>

ギギエエ・・・

ダイミョウは両ハサミを振りあげるとダウンしそのまま動かなくなつた

アツシ「じゃあーさん」

俺はそういうとハンマーを背負いため息をついた

ナオヤ「やるじゃねえか」

遠くからナオヤがぼびく声が聞こえる

俺はナオヤの存在を思い出し歩み寄つた

アツシ「偉そうに、帰るぞ」

俺がそう言ってナオヤを抱き起そつとしたその時だった  
次の瞬間ナオヤは宙に浮いていた

そしてナオヤのいた位置には一角獣の頭蓋骨が地中から顔を出して

いた

アツシ「んれ?」

ズズウ

地面から這い出るダイミョウザザミ

アイルーに運ばれるナオヤ

俺はとつさに後ろを振り返る

そこには動かなくなつたダイミョウザザミ

前を見る

そこには両ハサミを高々と掲げたダイミョウザザミ

俺は目をこすり頬を叩いた

そのダイミョウは高速横走りで俺との距離をつめてくる

アツシ「あ・・・あぶらああああああー!」

俺はダイミョウに背を向けるとわけもわからずキャンプへ逃げ帰り

急いでクエスト情報を確認した

アツシ「い、一体どうなつ・・・」

ダイミョウザザミ大量発生!

・・・あん?

ナオヤ「不意打ちとは卑怯な蟹だ」

アツシ「お前これどういっ・・・」

ナオヤ「ああ、沢山いたほうが早く素材集まると思つてな、あと一匹くらいいけるつ」

俺はナオヤにラリアットをかますとネコタクチケットを納品しきつさと砂漠を後にした

truth is foolish

(前書き)

眞実はくだらない

クエストに行く予定のない日の午後は「S」のメンバーが集会所に集まつてお茶するというのが日課になっていた

今日も雑談に花が咲く

連斗「そういえばさ、ナオヤってタカマサと相当仲が悪いみたいだが何があつたんだ？」

アツシ「さあな、兄弟つてことすら知らなかつた俺たちが知るわけないだろ」「ろ」

たしかに

ベア「でも気にはなるよね」

たしかに

連斗「いつちょ聞いてみるか」

席を立つた俺の腕をベアが掴む

ベア「思い出したくない過去かもしれないし、古傷には触れないほうが・・・」

連斗「大丈夫だろ、この前の体調不良もフリだつたしな」

俺はナオヤに鉱石をたんまり使われたことを思い出した

連斗「それに借りも返していい」

俺はそう言うと最近村長が作り出した農場へと向かつた

ナオヤは農場がお気に入りらしく毎日のように虫あみを振つている農場へ足を踏み入れるとさつそくナオヤの声が風に乗つて届いた

ナオヤ「釣りミニマジック！ そんじやお次は釣りと行きますかあ？」

連斗「おい」

ナオヤ「ぬおつ」

俺の声に驚いてミニマジックを落とすナオヤ

ミニマジックは慌てて地面に潜るとそのまま姿を消した

ナオヤ「ぬうあ！ 何すんだ！」

ナオヤが慌てて素手で地面を掘る

連斗「タカマサのことだけぞ」

俺がそう言つとナオヤの動きがぴたりと止まつた

連斗「結局あいつのギルドには入らないのか？悪い話じやないと思つが

ナオヤ「・・・お前には関係ないだろ、俺にはゾシージがある」

連斗「なんなら俺たち全員で移籍つてのも・・・」

ナオヤ「やめる！――」

ナオヤは立ち上ると俺の胸ぐらを掴んだ

土で防具が汚れる

ナオヤ「忘れさせてくれよ・・・彼女はもう戻つて来ないんだ・・・」

ナオヤはそういうと釣り場へと歩きだした

俺はちょっとした罪悪感を感じながらも集会所に戻るとみんなに話を聞かせた

アツシ「え？ 彼女？」

ベア「母親か誰かかな？」

連斗「するとその母親をタカマサが・・・？」

アツシ「あの精銳ハンターに限つてそんなことを？」

ベア「・・・ありえなくはないね」

謎は深まるばかりだ

ケン「なになに？ 新しい素材でも手に入れた？」

連斗「いや何、タカマサの話題さ」

ケン「ああ、隊長の」

連斗「ん？」

ケン「あついやほら、ギルドの隊長でしょ？」

連斗「ああ、そいつとナオヤの関係の話さ」

ケン「あんなことがあつたんじゃそりやね・・・」

ベア「え？」

アツシ「何だつて！？」

連斗「知つているのか！？」

ケン「・・・まあ、隊長とは付き合いで長いしね  
こいつ一体何者だ

連斗「・・・あいつらの間に何があつたのか俺たちは仲間として知つておく必要があると思つんだ」

ケン「わかつたよ、その・・・実は・・・」

ケンがしぶしぶ語り出し俺たち3人は息をのむ

ケン「子供のころ・・・」

こ、子供のころ・・・?

ケン「・・・ナオヤが大切に育てていた女王セツチャクロアリをタカマサが逃がしてしまったんだ」

そんつ・・・え?

ケン「それから2人は犬猿の仲つてわけさ」

ベアとアッシの2人が立ち上がる

ベア「さ、防具の手入れをしなくちゃ」

アッシ「俺もアイテムの整理をしないと」

連斗「ぐだらねえ・・・」

俺もそう呟くと席を立ち集会所を後にした

starting point (前書き)

原点

## starting point

「これはこの物語の主人公である俺がこの村、マスク村へ来て間もない頃の話だ

オカ「私が村長のオカ・シモだ、これからよろしく頼むよ」

ケン「僕は受付のケン・ハイ・スマッチ、よろしく!」

ケンが手を差し出す

俺はそれをシカトするとクールに名乗った

ナオヤ「俺の名はナオヤ・スネ・ジヤングルーネ」

ケンがしょぼくれた顔をして手を下げる

ナオヤ「それじゃあ依頼されたクエストにさっそく出発させてもらう、確かに内容は・・・」

ケン「隣村の畑がドスランポスに荒らされているみたいで、そいつを狩猟するんだ」

ナオヤ「わかつて、任せろ」

オカ「ほほ、期待してるじよ」

ふん、ドスランポスか・・・

一体どんなモンスターなんだろうか

ナオヤ「それじゃあ1時間後に出发する」

俺はそう言うと集会所を後にした

ケン「ところで村長、あのハンター大丈夫なんですか?」

オカ「しかたないじやろ、この村は金がないんじや、雇えるハンターなんて新米だけだ」

ケン「そうですよねえ、でもあの自信を見る限りでは中々腕のよさそうなハンターみたいですし、よかつたですね」

オカ「まったくじや、この村の未来も安泰じやな」

ケン「そしてあのハンターが立派に成長してくれれば依頼も増えてこの村も大きく・・・」ヒヒ

オカ「まあハンターはナオヤ一人だけじゃからそう簡単には行かないじゃろうけどな」

ケン「もう一人くらい空から降つて来たりしないかな、ぐるぐるつて」

オカ「くだらん」と言つてないでクエスト受注じや」

ケン「はーい」

ナオヤ「フスウー」

息を吸い込む

ナオヤ「ンパア～」

息を吐く

森の創る新鮮な空氣と潮の香りがほどよく合わさり俺の鼻孔をくすぐる

両手を広げると俺の裸体を潮風がすり抜けていく

心地よい風に爽やかな日差し

これが密林のキャンプか

悪くない、悪くないよ

俺は目の前にある青い箱に歩み寄るとそつとフタを開けた

ナオヤ「ふん」

俺は中を見回すとその中身をポーチにしまい込んだ

ナオヤ「さて、まずはエリアーから探索するとするか」

俺はそう呟くと地図を片手にキャンプを後にした

ナオヤ「ん・・・?」  
「これ・・・は・・・」

俺は足を止めしゃがみこんだ

そして足元にあるそれをそつと手で包み込み

ゆっくりと持ち上げた

その身に日差しを受け美しく輝いているそれはまさに神が創りだした結晶そのものだった

完璧とも言つていいその曲線に美しいまだらの模様

これが・・・

ナオヤ「特産キノコが・・・！」

ブヒブツヒ

ん？

俺の足を誰かがつづく

ナオヤ「何だ？」

足元をみるとそこには俺の体重よりもはるかに重いであるづテカイ  
ブタがいた

体中に苔が生えていて見るからに汚そうだ

ナオヤ「ふん、下品な奴だ、あっちへいけ」

俺はブタを思い切り蹴飛ばすと再びキノコを探集しようとしゃがみ  
こんだ

ブツビ！

ナオヤ「どうお！」

強い力で後ろからどつかれた俺は顔面から地面へと突っ込んだ

ナオヤ「ぬぢつ」

振り向くとそこには今にも再びこちらへ突進をかまそつとするブタ  
の姿があつた

ナオヤ「ほ、ほつ・・・俺とやろうつてのか、いい度胸じやぶつ」

俺がセリフを言い終わる前にブタは俺のスネへと頭突きをかました

ナオヤ「かぶつ！」

俺はあまりの激痛に思わず飛び上がった

ナオヤ「ぐきぎきぎ・・・」

スネを抑えながらもブタをみよつとするが涙でかすんでよく見えない  
その頭は突進用なのかはわからないが丸く突き出して硬質化して  
いるようだつた

ナオヤ「どうやらお前は俺を本気にさせたようだな」

俺はそういうと背負つていた武器、大剣ボーンブレイドを掴み、そ  
して構えた

ナオヤ「ほぐつ」

一瞬何が起きたのかわからなかつた

俺は肩に激痛を感じ思わず武器を離してしまつていて  
まさかここまで重さとは・・・やるじゃねーか

俺は深呼吸をすると再び大剣を構え、振りかぶり、そして振り下ろ  
した

ナオヤ「よつつつ！――！」

俺のキノコを漁るクソブタに俺の大剣が制裁を加えた瞬間だつた  
ブビッビィ・・・

ナオヤ「ふん・・・」

ブタの鮮血を拭うと俺は剥ぎ取り用の小型ナイフを取り出しブタの  
その身に突き刺した

形が崩れないように丁寧に皮を剥ぎ肉を切り取る

・・・生肉か、後で焼いてみよう

それから俺はキノコの採集ポイントに目を向けたが既にブタが食い  
荒らした後で採集できそうな物はなかつた

ナオヤ「エリア9だな」

俺のキノコハンターとしての勘がエリア9に反応した

そこにはキノコ採集ポイントが少なくとも2つはあるに違いない

俺はそう確信するとエリア9へと続く段差を上つた

ナオヤ「ほう、池か」

エリア9についた俺は小さな池を見つけ歩み寄つた

中々沢山の魚がいるようだ

釣つてみたいがあいにく釣り餌は手元にない

しうがない、フィッシュハントはまたの機会つてことにするか

俺は再びキノコを求め歩き出した

その時だつた

ブグザア

いきなり地中から何かが飛び出し俺のボディを強打した

ナオヤ「いやぐつ

俺はあまりの激痛に声も出せず転げ回った

ナオヤ「ひつひいつひいつ……」

何とか起き上がりさつきまで俺のいた場所をみるとそこには見たこともないようなデカイ蟹がいた

俺と目が合つた蟹はハサミを振り上げ高速横走りで俺との距離を詰めてきた

ナオヤ「ぴつぴぎやああああああああああああああ」

命の危険を感じた俺はエリアの奥へと猛ダッシュで逃げたしかし数歩足を運んだ地点で俺は再び地中からの奇襲に合い

次に目覚めたときはキャンプの砂浜で心地よい日差しをその身に受けていた

俺は肉を焼いていた

あいつから逃げられなかつたのはスタミナが足りなかつたせいだそもそもあんな森の中に蟹がいるなんておかしいだろクソが密林の中心部へは違うエリアから侵入したほうがよさそうだ

俺は勢いよく地図を開く

勢いをつけすぎ地図が真つ一つに裂け俺はその勢いで転げた

ナオヤ「くそ！なんなんだよ！」

立ち上がり肉をみると真っ黒な焦げ臭い煙を上げていた

ナオヤ「くそ！」

落ち着け、落ち着くんだ、真のハンターはこんなことには動じない俺は安全だと思われるエリア4を経由して密林の中心部へ乗り込むことにした

ナオヤ「もうキノコだと蟹だとかにかまつてている暇はねえ・・・全力で行く！待つてろよドスランポス！！」

俺は焦げ肉を海へ投げ捨てるヒリア4へと疾走した

ナオヤ「行くぜよ！」

周りは見渡す限りの水平線

眺めているだけで思わず気が遠くなりそうだぜ

俺にそんなものを見ている暇はないがな

ナオヤ「ふおおおおおおおおおおおおおおお

疾走することに夢中だった俺は田の前の地中から噴き出していた砂煙に気がつかなかつた

ナオヤ「んぎ」

俺は地中から現れた蟹の奇襲を受け海へと投げ出された  
ナオヤ「じゃぼつづぼつぼえつ」

思わず溺れそうになりながらも慌てて態勢を立て直す  
な・・・何でこんなところにも・・・って砂浜だから妥当か  
そつそんなこと考えていい場合じやない！

俺は立ち上がり武器を構え再び俺にこじみよつてきたヤオザミの攻撃を防いだ

ナオヤ「慌てんなつて、お前の相手ならたつぱりとしてやるぜー！」

俺はそう言つと大剣を振り下ろした

ヤオザミの脳天に直撃した、一応

ガンッ

攻撃が勢いよくはじかれた俺は思わず尻もちをついた

ナオヤ「なつ・・・・・固つ・・・・・」

ゆっくりと振り向くとそこにはハサミを振り上げ俺にこじみよるヤ

オザミの姿があつた

ナオヤ「こつここれは夢だ、ゆ夢なんだ、こんなことがあつていいはずがないんだ」

俺は目を閉じた

そして祈つた

・・・・・

目を開けるとそこはキャンプだつた

ほら夢だつた

輝く日差しが眩しいぜ

俺はゆっくりと立ち上ると叫んだ

ナオヤ「さあ！ドスランポス狩獵クエストの始まりだ！」  
それから俺は走り去るアイルーたちを背にツタを登り始めた

ここがエリア5か

ここなら水は一切ないようだし安心だぜ  
さて、エリア6にでも向つてみるか

エリア6へと続く洞窟の前で立ち止まる

洞窟か・・・いかにもモンスターの巣つて感じだぜ  
俺は覚悟を決めると目の前の洞窟へと飛び込んだ

ナオヤ「・・・なんだ、ショボイ巣だぜ」

俺はただ骨が敷き詰められただけのエリア6に少々がっかりした  
もつところ、何というか派手なのを期待したが意外と質素だな  
ナオヤ「ほんとうにここがエリア6かあ？」

俺は地図を取り出し確認しようとした  
ん？

地図がない

どうやらエリア5に落としたようだな  
俺がエリア5へと戻るうと振り返ると赤いトサカの青い恐竜が飛び  
かかってくるのが目に入った

ギヤーン！

ナオヤ「」

俺が何かしらの音を発する前にクエストは終了していた  
地図を取りに戻る必要はなくなつた

俺は

帰りの船の中で

静かに

泣いた

king likes flame (前書き)

王は炎がお好き

ベア「悪いナビクエストに付き合つて欲しいんだー

連斗一 ああ、かまわんよ

アツシ「何の素材が欲しいんだ？」

ベアーリボレイアを、武器がこれだから防具もレイア一式にしよう

6月  
一九

連斗「じゃあ今夜에서도出発するか」

アッシュ・オーケー

バア「咄咄三日月ノロゴズ」

ナオヤ「早くしろ、あまり待たせるな

ナオヤはそう詰つどぞ」かく騒ぎ出しつて行つた

道徳の教科書

ベア「悪いね、頼むよ」

それで俺たちは解散し夜に再び集まると張り切るナオヤを先頭に沼地へと出発した

ナホヤ「ハセキハセキハセキ...」

エピストル開始直後

連斗「何なんだあいつは」

アツシ一相<sup>ヨウ</sup>ギノ<sup>ノ</sup>一が好きらしいな」

卷之三

連斗一まつたくだ

俺はそういうとまざ最初に携帯食料を確保し他の支給品をポーチに入れた

連斗「さ、行くか」

俺は悔しそうに肉を焼き始めたアツシを尻目にキャンプを後にした

連斗「俺とアツシはエリア8でレイアを待つ、ベアはナオヤを探してくれ」

アツシ「頼んだぞ」

ベア「りょーかい」

俺たちはそういうと2手に別れた

エリア8についた俺は暇つぶしに虫とりをした  
このエリアは腰あたりまで高さがある植物が密生していくやかましいがその分虫が豊富なのだ

連斗「お、光蟲ゲット」

アツシ「おかしいな、ブルファンゴがいない」

アツシは遠くでブルファンゴ狩りのようだ

連斗「ヤベ、ロイヤルカブトじゃん」

アツシ「それにしても妙に静かだな、今日の沼地は」

遠くではアツシがブルファンゴを探しているようだった

連斗「今度はドスヘラクレス」

アツシ「おい！」

遠くでアツシが叫んでいた

連斗「んん？」

アツシ「あれ・・・」

アツシが指を指すほうを見るとなにやら大きな塊が見えた

俺はそれに何か嫌なものを感じると虫あみを放り出しアツシの元へと駆け寄った

ベア「エリア1から順番に見ていくとするか」  
まったくどこに行つたのやら

ベア「まあ探すついでに採集くらいしてもいいよな」

僕はそういうとエリアーの隅にあるタル置き場へ向かつた  
タル置き場といつても残骸ばかりで使えるものはほとんどないんだ  
けど

ここはメラルーたちのごみ置き場みたいな所にもなつていてたまに  
掘り出し物があるのさ

ベア「爆薬・・・なぞの頭骨・・・つづん・・・」

でも今日はゴミしかないみたいだ

僕は立ち上がると再びナオヤを探し始めた

ベア「それにしてもモンスターが一匹も見当たらなくな・・・」

僕は静寂に支配された沼地に違和感を覚えながらもナオヤ探しを続  
行した

エリアー2に到着し辺りを見回すがナオヤの姿はない

ベア「いないか、一応ここにもキノコはあるんだけどな」

そんなことを言いながらキノコ採集ポイントに向かつた

そこには真新しいであらう掘り起こされた跡と足跡が残されていた

ベア「つたく・・・」

僕はため息をつきながらその足跡を追いエリアー4へと向かつた

エリアー8の一一番奥のほうに何やらドテカイ塊が見える

連斗「一体なんだ?」

アツシ「わからん・・・」

アツシもそれには何か嫌なものを感じ取つたらしく一人では近寄る  
うとしない

俺たちは顔を見合わせると言葉を交わすまでもなくその物体に歩み  
寄つた

連斗「こ・・・こいつは・・・!」

アツシ「・・・どういふことだ?」

そこについた塊

それはリオレイアの死骸だつた

連斗「他のハンターとクエストが重なったか?」

アッシ「このクエストは依頼されたものではないからそれはないはずだが・・・」

俺たちは唖然と立ち尽くしていた

死骸はまだ新しいようだった

アッシ「おいこれ」

アッシがレイアの死骸を指差す

アッシ「この傷ハンターが付けたにしてはデカすぎるし深すぎないか?」

言われてみればそんな気がしなくもない

それに何だか所々黒く焦げたような傷もある

連斗「別にそんな深く考えても何もねーよ、さつさと剥ぎ取るひざが俺がそういった時だつた

辺りが急に蒸し暑くなつた

アッシ「ん・・・何だか急に暑くなつたな」

連斗「まるで火山にいるみたいだ、何だこれ」

アッシ「この気温の変化に静かすぎる過ぎるフィールド・・・」

アッシが呟いた

連斗「ん?」

アッシ「それにまだここに来てから一匹もモンスターを見ていない、何かがおかしい」

言われてみれば確かに

アッシ「退散しよう」

そういうつて俺たちがキャンプへ戻るうと振り向いた時だつた

1つの影が俺たちの進路に現れた

ベア「ナオヤ!」

僕はエリア4にナオヤの姿を確認すると駆け寄った

ナオヤ「あわつ、あぶねえ!」

どうやらナオヤは夜の沼地に湧きだす毒液の中に浸かっているキノ

「を取るうとしているよつだつた

ナオヤ「集中してんだ！話しかけんな！」

ベア「ナオヤ、何か変だ」

ナオヤ「おう、キノコがないのは俺が採つたからだ」

ベア「違う、モンスターがいないんだ、おかしいと思わないかい？」

ナオヤ「夜だから寝てんじやん？」

ベア「ナオヤ、僕は真面目に・・・」

僕がそこまで言つた時だつた

ナオヤ「のわつ」

ナオヤは態勢を崩し毒沼に顔面からめり込んだ

ナオヤ「びえつのぼつんべろつ・・・」

慌てて毒沼から這い出したナオヤはそのまま仰向けに倒れた  
そしてゲロを吐きだした

顔面がゲロまみれになり自分のゲロで軽く窒息している

ベア「まつたく・・・」

僕は痙攣するナオヤを起こし漢方薬を飲ませると落ち着くのを待ち  
アッシと連斗を探しにエリア8へと向かつた

俺たちは2人は啞然と立ち尽くしていた

俺たちの前に舞い降りたそれは毅然とした様子で俺たちの前に立ち  
塞がつた

それは炎をまといエリア8に密生している植物を焼き払いながら俺  
たちを見据えた

その姿は王と呼ぶに相応しかつた

連斗「炎王龍・・・」

アッシ「テオ・テスカトル・・・」

俺たちはそう呟くのが精いっぱいだった

次の瞬間にはテオは雄たけびをあげていた  
どちらが速かつただろう

同時かもしれない

テオが走りだしたとき俺たちは何故か逃げなかつた

上手く説明できないが

ビビっていたんじゃない

俺はテオの突進を回避するとすかさず貫通弾を撃ち込んでいた  
アッシュをみると防具を焦がしながらも立ち回っていた

そう

俺たちは王に戦いを挑んだのだ

hot one is not only you (前書き)

熱いのはお前だけじゃない

hot one is not only you

エリア8に入った僕は驚いた

密生している植物が音を立てて燃えているのだ  
そしてまるで火山のように蒸し暑い

ナオヤ「んじやありやあ！」

ナオヤが指差す先を見る

そこには紅い鱗をまとった獅子と戦うアッシと連斗の姿があった  
ベア「一体どうなつて・・・」

ナオヤ「やべつ・・・急にスネの調子が・・・」

ナオヤが後ずさりする

ベア「まずい押されている！早くサポートしないと！」

僕はそういうと2人の元へ駆け出した

ナオヤ「ちょっとマジかよ！」

ナオヤも一人で戻るわけにはいかないようでしづしづ後から付いて  
きた

アッシ「何で暑さだ！攻撃してるのはこっちが倒れそうだ！」

アッシはそう言うとテオから距離を取つた

連斗「あの炎を消すには角を破壊しかないが・・・龍属性の武器な  
んで俺たちは・・・」

ベア「毒でも消えるでしょ」

アッシ「ベア！」

ベアとナオヤが合流しテオとの戦闘に加わった  
連斗「悪い、頼むぜ」

ベア「ああ！」

ベアはそういうとテオの突進後のわずかな隙を狙いプリンセスレイ  
ピアで斬りつけた

ナオヤ「ふん、どちらが熱いか・・・その身をもって知るがいい！」

レッドウイングを背負つたナオヤがテオに向かつて駆けだす

アッシ「俺の水だつてこの程度の火を消すくらいのことは出来るぜ

！」

アッシがナオヤの後を追う

俺はその後ろから援護射撃だ

ベア「そらそら！」

ベアの攻撃によりテオは毒状態になつたようだつた  
テオを覆つていた炎が弱くなる

連斗「今だ！」

4人で一斉攻撃を仕掛ける

グオオオ

しかしテオは怯むどころか炎のブレスを吐きだした

アッシ「ぶひつ」

間一髪のところでアッシがそれを回避する

アッシ「あんなのに直撃したら焼き豚だぜ・・・」

しかしテオはそれを見逃さなかつた

すかさず突進をかますとアッシを吹き飛ばした

アッシ「あぶらつ」

壁に叩きつけられたアッシはそのまま倒れこんだ

ギオオオ

すかさずテオがアッシに飛びかかる

テオがアッシに爪を立てようとしたその時だつた

辺りが閃光に包まれた

ベア「一時撤退だ！」

連斗「くそつ」

閃光に混乱して暴れまわつてゐるテオを背に俺とベアは一人がかりでアッシを抱えるとエリア6へと撤退した

ナオヤ「俺色に染まりな」

ナオヤはそう言つとあらぬ方向に向かつて暴れでいるテオにペイン

トボールを投げつけエリア8を離脱した

アツシ「ぶひ・・・」

アツシの怪我は思ったよりも酷くはなくベアの手当で済んだ

ベア「それにも・・・」

ベアはアツシに包帯を巻きながら言った

ベア「まさか古龍がいるとはね・・・」

連斗「まったくだ、予想外すぎる・・・」

俺は炎をまとった獅子の姿が頭から離れなかつた

ナオヤ「で、どうすんのよ」

ナオヤが核心を突く

連斗「正直なところ、今回は何のよつてないかないだろ

う・・・」

俺は本音を言った

ベア「そうだね、ここは大人しく・・・」

ベアも俺の意見に賛成らしく帰りの気球の準備に取り掛かる立

ち上がる

そのベアの手首をアツシが掴んだ

アツシ「笑わせんな、こんな無様にやられて逃げられつかよ・・・

！」

ベア「気持はわかるけど・・・今回は今までとはわけが違うんだ

ベアが無理やり歩き出す

アツシ「俺たちならやれる、今まで何度も奇跡を起こしてきただじやないか」

連斗「アツシ・・・

こうなつたアツシを説得するのは不可能だらつ

ベアもそれはわかつたようだつた

ベア「ふつ・・・わかつたよ、その代わり

ベアがほほ笑む

アツシ「・・・何だ？」

ベア「ぜ・・・

ナオヤ「全力で行くぞ！」

ここで割り込むのかお前は

俺たちはちょっと不機嫌そうなベアが取り出した地図でテオの居場所を確認すると再び炎の中へと飛び込んだ

to scorching outskirts (前書き)

灼熱の果てに

エリア8へ戻るとテオはまだそこにいた  
背筋を伸ばしまるで俺たちを待つていたかのよつこじりを見据えた

アッシ「借りは返させてもらうぜ！」

アッシはそう言つとテオに向かつて走り出した

ナオヤ「抜け駆けは許さんぜ！」

ナオヤが後に続く

ベア「サポート頼んだよ」

連斗「おう」

俺はそう言つと駆けるベアの背後からボウガンを構えた

アッシ「ぶああ！」

アッシがテオの顔面にハンマーを叩き込む

ベア「ほいほい！」

ベアは細かい動きでテオを翻弄し状態異常へと持ち込む

ナオヤ「お前なんて俺の相手じゃねーんだよー！」

ナオヤはそう言つとテオの後ろ足を斬りつけた

ナオヤ「死角あり！」

その時だった

テオが立ち上がり雄たけびを上げた

ガギヤアアアオン！！

怒り状態か！

俺はここぞとばかりに麻痺弾を撃ち込む

怒り状態のうちに少しでも時間稼ぎをしなければ！

ガウ！

テオは雄たけびに耳をやられていたナオヤをバックステップによつて吹き飛ばした

ナオヤ「べらつ！」

そしてまるでナオヤ以外の者が視界に入つていなかのようにナオ

ヤだけに攻撃を始めた

ベア「まずい！能力差に気づいたようだ！」

アツシ「弱い奴から片付けるって戦法か！」

ベアとアツシが必死にテオに攻撃を浴びせるがテオはまったく怯まずにナオヤに攻撃を加えていた

ナオヤ「ほおつ！危ねえ！」

ナオヤはテオの攻撃をうまい具合に回避していた

もう少し持ちこたえてくれ！

俺は麻痺弾を撃ち続けていた

アツシ「連斗！まだかよ！？」

ベア「古龍は状態異常耐性が高いんだ！」

アツシとベアの声が聞こえる

ナオヤ「強者を先に片づけて弱者は後でゆっくりと料理か・・・気に入らねえ戦法だ！」

ナオヤがテオの頭に大剣を振り下ろす

ベア「馬鹿！そんなことより回復だ！」

ベアが叫ぶ

ナオヤ「おう、そうだった」

ナオヤが回復薬を飲みだした

アツシ「今じやねえよ！」

アツシの叫びも虚しくナオヤはテオのボディブローを直に受けそのまま運ばれていった

連斗「っしゃ！」

俺はテオが運ばれるナオヤに気を取られている隙を見逃さなかつた  
テオを麻痺らせたのだ

連斗「いっけええええええええええ！」

アツシとベアの総攻撃がテオにお見舞いされる

今回は俺も遠慮はしなかつた

殴りになんて行かずにとにかくありつけの弾を連射した

こんなチャンスはもう訪れないだろうからな

ナオヤ「どりやーこなくそ！」

いつの間にか帰ってきたナオヤも攻撃に参加したいける・・・！

俺がそう確信しかけた時だつた

テオが麻痺を破ると再び雄たけびを上げた

ギヤアン！

テオを包む炎が復活しあたりを火の粉が包み込んだ  
そして一瞬の静寂が訪れた

俺は何かを感じるととっさにテオに背を向けて走り出していた

その直後だつた

俺の背後で空間が爆発し辺りは炎に包まれた

ベア「のあああーー！」

アッシ「しゅがあつーー！」

ナオヤ「んぎー」

遠くからの仲間の絶叫が耳に入り俺はとっさに振り向いた  
そこには一面の炎の海とその中心に佇むテオ  
そしてその視線の先には瀕死のダメージを負い倒れ込んだ3人の姿  
があつた

俺は走り出した

何も考えていなかつたわけじゃない

この一瞬で俺の頭は1つの答えを導き出していた

ガンナーの俺は怒り状態のテオの攻撃をくらつたらひとたまりもない  
だからここから弾を撃つてテオの気を引くのが普通だ  
だがもしテオが俺ではなくあいつらを先に片付けるという選択肢を  
取つたら？

俺は弾なんかよりもアイツの気を引けるであろう方法を選んだ

連斗「ぱああああーー！」

俺はテオの後ろ脚をボウガンで殴りつけた

連斗「まつーー！」

何度も

連斗「まつ！－！」

何度も

連斗「まつ！！！」

何度も

最初は蚊にでも刺されていたような感覚だつたのか見向きもしない  
テオだつたが何度も殴るうちにかゆみを感じたらしく首をこちらに

向  
け  
た

俺は炊爨のジーパトで体力を削られながらも叫びた

テキスト

テオのブレスに焼きつくされる俺が最期に見たのはエリア 8から何とか逃げだす3人の姿だった

**firemen** (前書き)

消防士たち

ゆつくりとまぶたを上げる

そこには俺の顔を覗き込むアッシとベアの姿があつた  
連斗「ぐつ・・・！」

身体を動かそうとするが激痛がそれを妨げる  
ベア「動いちゃダメだ、今栄養剤を作るから」

どうやら俺も誰かさんでおなじみのベースキャンプに運ばれたらしく  
俺はあたりを見回した

すると俺の頭に一つの疑問が浮かび上がった  
テオのこともそうだがこれはもつと気になつた

連斗「なあ・・・」

アッシ「大丈夫だ、テオなら・・・」

連斗「なんでナオヤも俺の横で倒れてるんだ？」

俺は口から泡を吹き痙攣しているナオヤを横目で見ると言った

アッシ「ああ・・・お前をドキドキノコで回復させようとしたやがつ  
たから本人に食わせたら毒と臭いと疲労状態になつて倒れ込んだの  
よ」

アッシがあきれ顔で説明する

連斗「命の恩人だな、礼を言つぜ」

俺はほほ笑んだ

アッシ「いや連斗、礼を言つのは・・・」

連斗「おつと、その続きはこのクエストをクリアしてからだぜ」

俺はそう言つとベアが作った栄養剤を飲みほし立ち上がつた

ベア「ゴホンゴホン」

ベアが咳払いをした

どうやら何やら言いたいことがあるらしい

ベアが口を開いたその時だつた

ベア「ゼ・・・」

ナオヤ「全力で行くぞ！！！」

栄養剤の余りを飲み回復したナオヤはそう叫び起き上がった

エリア8の植物はすべて燃え尽きもはやそこは焼け野原だった  
俺たちはすかさずテオを取り囲んだ

するとテオは息を吸い込むと動きを止めた

いきなり粉塵爆破か・・・！

連斗「くるぞ！」

俺とアツシはテオから少しでも遠ざかるために走り出した

ベアはガードの態勢をとった

だが、ナオヤは違つた

ナオヤ「こここれつで・・・キメる！」

逃げ遅れたナオヤは何とかプライドを保とうとテオに斬りかかった  
しかし明らかに腰が引けているし胴体を狙つたであろう刃先は尻尾  
のほうへと逸れていった

ナオヤはそのまま大剣を振り下ろしたと同時に田をつぶり尻もちを  
ついた

ナオヤ「びえ・・・」

死を覚悟しうずくまるナオヤ

だが辺りを包んだのはナオヤの絶叫ではなくテオのそれだった  
ガヤアアアアアアア！

連斗「え」

アツシ「え」

ベア「え」

テオの尻尾が宙を舞つていた

本体から切り離されたそれは地面に落下すると鈍い音を立てた

ギヤアン・・・

テオは力なく雄たけびを上げると何とか起き上がつた

そして上空へ飛び立つと沼地エリアとは逆の方向へと向かつて行つた

連斗「これ・・・は？」

俺は一瞬何が起きたのかわからなかつた

ベア「どうやら撃退したようだね、僕たちから逃げたんだ」  
ベアが武器をしまいながら言つた

アッシ「待ちやがれ！くそつ！」

アッシがハンマーを地面に叩きつける

ベア「まあ、命があつただけいいとしましょ」

ベアはアッシの肩に手を添え慰めた

連斗「そうだな・・・よくやつたよ、俺らは」

多少悔しい気持ちも残つたがベアの言つとおりだ  
生きていよかつた

アッシ「どこまでも追い詰めてやるぜー！テオ・テスカトル！」

アッシが天に拳を向け叫んだ

その横には正反対に冷静な男の姿があつた

ナオヤ「俺とお前は水平線だ・・・どこまで行つても交わらない・・・

・あばよ」

ナオヤは遙か彼方上空で翼を羽ばたかせているテオに遠い視線を送つていた

insect collecting is fatal (前書き)

虫捕りは命取り

連斗「なんだって？」

俺は思わず声を上げた

ナオヤ「だから、今まで使つてきた武器とは違う武器でクエストを行こうぜ」

太刀を背負つたナオヤが言つた

ベア「もう準備してるし・・・」

アッシ「まあ、気分転換にはなりそうだな」

連斗「ううむ・・・」

まあ確かにサポートにもマンネリを感じていたのも事実だしこたまには前線で戦つてみるのもアリか？

連斗「そうだな、異論がないならやってみるか

ナオヤ「おっしゃ！じゃあ今夜出発で！」

ナオヤはそう言つと農場へ走り去つた

ベア「僕は」といふよ

ベアが言つた

連斗「何気に乗り気だな、俺はじっくり吟味させてもらひや」

アッシ「俺もそうするか

それから俺たちは解散し各自今夜のクエストに備えた

連斗「クエストだが、行きたいクエストがある」

ベア「珍しいね、連斗が自分からなんて」

連斗「ああ、コイツとはケリをつけておかぬきやならないからな」

俺はそう言つとクイーンランゴスターのクエストを受注した

この世界に来て初めて遭遇した敵

あの時は散々な目にあわされたが今回はそっぽいかねーぞ

ナオヤ「怖い顔しちゃつてえ、さつさと行くぞ」

ベア「あれ？アッシは？」

ベアがそう言つたのと同時にアッシが集会所へと駆けこんできた

アッシ「悪いな、武器選びに時間がかかっちゃった」

アッシはそういうと腕についている盾を叩いた

背中には巨大な槍

どうやらアッシはランスを選んだようだ

アッシ「連斗は双剣か」

アッシが意外そうな表情をする

連斗「まあな、前線の俺をとくと見る」

ベア「ふふ、自信たっぷりだね」

ナオヤ「んじゃ行くぞ！」

こうして俺たちは虫捕りへ出発した

連斗「たしかアイツはエリア6だつたな」

俺は地図を広げ言つた

ナオヤ「まあ虫ごとに焦る必要はない、ゆっくり行こうぜ」

ナオヤが仕切る

ベア「ところでアッシの武器は何だい？」  
「アッキィカイケビ

アッシ「バベルさ」

ランスを代表するビジュアルのイカした武器だ、属性はないが

アッシ「お前の『』は・・・クイーンブラスターか」

ベアは相変わらずリオレイア素材の武器だ

ついでに俺の武器も紹介しておこう

こいつの名はアイシクルダガー

属性は氷で見た目も属性もクールな双剣だ

ナオヤ「俺の太刀は鬼斬破！」

誰も聞いていないのにナオヤが自慢げに素振りをする

太刀としては王道の鬼哭斬破刀に派生するが『』のはまだ下位武

器だ

連斗「さて、まずはエリア7でランゴスタ狩りだ」

ベア「大量発生したランゴスタを狩らないと出てこないみたいだね」

アッシ「さすがは女王様」

ナオヤ「俺はキノコ採つてから行くわ」

ナオヤはそういうと一人別エリアへ駆けて行つた

エリア7へ入るとそこには今まで見たこともないほど大量のランゴ  
スタが発生していた

言い忘れていたが俺は虫が嫌いだ

グロテスクな外見に耳障りな羽音・・・気持ち悪い

アッシ「びいいいいいいいいふつ！」

アッシがランスを構えると同時にランゴスタの群れへと突進していく  
外見と勢いが合わさりそれはまるで重戦車のようだった  
すかさずアッシにランゴスタが群がるがアッシはまるで紙切れを割  
くようにランゴスタを碎いていく

ベア「やれやれ」

ベアはそう言うと『』を構え遠方からアッシのサポートを始めた

連斗「俺も行くか」

俺は寄ってきたランゴスタに剣を突き刺すとそのまま引き裂き飛び  
散る体液を背にエリア中心へと疾走した

ナオヤ「エリア1とエリア2だろ・・・あと3は行つたから次は6  
だな」

俺は密林のキノコをすべてこの手中に収めるべく歩を進めていた  
今回のターゲットは特産キノコなんてチャチなもんじゃない

厳選キノコ、奴を狙いに行く

厳選キノコは纖細なキノコだ

ゆえに人が踏み込むことの少ないエリア6に多く自生しているとみた

ナオヤ「よつ」

俺はエリア3の段差に飛び乗りそのままエリア8をスルーしエリア

6へと突入した

ナオヤ「なつ・・・！？」

俺は立ちすくんだ

そこには大量のランゴスタが耳障りな羽音とともに宙に浮かんでいたのだ

ナオヤ「はつ、俺は障害があるほうが燃えるんだよ！」

俺は太刀を引き抜くと次々にランゴスタを切り裂いていった

ナオヤ「ふん、他愛のない・・・」

チンツ

太刀を納刀した際の音が心地よい

ナオヤ「さて・・・ほう、やはりな」

俺はここぞとばかりに密生している厳選キノコが目に入り思わず笑みを浮かべた

俺がそつとキノコに手をかざしたその時だった

ブオオオオンオンオン

背後から虫が羽ばたいているような爆音が響いた

ナオヤ「クソ虫どもが、まだ生きてやがつ・・・」

太刀を引き抜き振り向いた俺の目に入ったのは人間の数倍はあるうほど巨大なランゴスタだった

ナオヤ「びえ・・・」

次の瞬間俺は毒液を浴び目を開けるとそこには青空が広がっていた  
最期に感じたのは股間に広がる温もりだった

ベア「僕は周りのランゴスタをやるから二人はクイーンを！」

無数のランゴスタが飛び交う中ベアが叫ぶ

アッシ「まさか仲間を引き連れているとはな・・・強敵だぜ」

アッシがランゴスタの攻撃をガードしながらもクイーンとの距離を詰める

その瞬間クイーンがアッシ目がけ大量の毒液を吹きかけた

ブリュウウウウウ

連斗「気をつけろ！その毒液は状態異常属性が！」

俺は叫んだ

アツシ「はん、問題ないぜ」

アツシはその巨大な盾でガードをして毒液を防いだ  
しかしかなりのけ反つているようだつた

アツシ「ぐつ・・・なかなかやるな、だが！」

そう言つて突進をしようと構えたアツシに無数のランゴスタが飛び  
かかり次々と麻痺針を突き刺した

アツシ「ぶひ・・・」

アツシは身体を痙攣させながら倒れ込んだ

ベア「麻痺状態だ！まずい！」

連斗「くそ！」

俺はアツシの元へ駆けよるがそこにすかさずクイーンが突進をかます

連斗「ぱあつ」

俺は吹き飛ばされ壁に叩きつく

ベア「ああ！周りのランゴスタが邪魔で・・・！」

粉塵を飲み俺たちを助けようとするとランゴスタがさせなかつた  
ふとクイーンを見ると足を「づ」めかせ尾をこちらへ向けていた  
毒液の予備動作だ！

俺はなんとか起き上がるうとするが腰を痛め立ち上がれない  
アツシをみるとさつき倒れたその場でいまだに痙攣していた  
ベアは無数のランゴスタに襲われそれの対応で手いっぱいのようだ  
つた

終わったか・・・

俺がそう思い目を閉じた瞬間だつた

ナオヤ「またせたな！」

聞き覚えのある声がしたほうを見るとそこには人影があつた  
エリア5からの入口にあるそれは逆光を背に指を天に向けて言い放  
つた

ナオヤ「闇夜と共に夜空の灯火を断つ漆黒のフュニッシュクスー俺の名  
は・・・ナオヤ・スネ・ジヤングルーネ！」

そう言い放つとナオヤは閃光玉を投げた

ビイイイ

閃光が辺りを包みこみ無数の叫び声が反響する

ナオヤ「今だ！」

そう叫んだナオヤはクイーンへ走り寄り気刃斬りをお見舞いする  
ベアは粉塵を飲むと弓を引き絞つた

それにより回復した俺は鬼人化する

start (前書き)

始まり

気がつくと俺は見知らぬ部屋にいた

連斗「ここは・・・？」

起き上がり辺りを見回す

薄暗く埃っぽい

そこは知らない場所ではなかつた

忘れていただけだつた

連斗「俺の・・・部屋？」

しばらく何が起つたのかわからなかつた

頭がクラクラする

確か俺は・・・

連斗「ん・・・」

何かが俺の身に起つたような気がする

しかしそれが何なのかは思い出すことができなかつた

ふと目の前にあるP.Cが目に入った

毎日、いやつい先ほどまでこれに向かっているはずだつたが何だか

久しぶりに見たような気がした

連斗「モンスター・・・ハンター・・・？」

画面に表示された文字を無意識に読み上げる

そうだ

俺はモンスターハンターをやっていたんだ

そしたらいきなり・・・

・・・寝てしまつたようだな

時刻をみると既に夜明け近かつた

連斗「ふあーあ」

思わず大口を開けてのあぐびが漏れる

連斗「寝るか」

そう呟きベッドに入つた彼はものの数分で再び眠りこんでしまつた

半年後

連斗「さーで、今日もモンハンやるぜ」

連斗はそう独り言を言いながらとPCを立ち上げた

モンスターハンターを起動した彼の目に大きな文字が飛び込んできた

”モンスターハンター 新作発売決定！！！”

連斗「おおーーーー！」

思わず声が漏れる

待ちに待つた新作か！

そろそろこのバージョンにも飽きてきたところなんだ  
情報を読み進めた限りでは既にソフトは完成しており後は出荷など

の手続きが残るのみだそうだ

連斗「カプンコ仕事はえーな

腕がなまっちゃいけねーからな

俺が気を取り直し狩りの世界へと入ろうとした時だった

連斗母「連斗ー宅配便よー」

階下から母親の声が響く

つたく、いいとこだつてのに

連斗「あーわかった、後で見るから」

俺はそう叫ぶと再びPCに向き直る

連斗母「なんかすごい大切そうな物ね

ドアを開けながら母親が言った

連斗「おいー！ノックぐらいしろよーもうわかったから、それそこに置いて出てつてくれ！」

俺は何やらブツブツ言っている母親をさっそく部屋から追い出した  
つたく、いつもこうだ

家族間にもプライバシーってもんはあるだろうが

再びゲームを始めようにも現物が目の前にあったのでは集中できない

連斗「つたく、何なんだよコレ」

ガサガサと乱暴に包装紙を剥がし中の段ボールを取り出す

連斗「差出・・・え・・・カプン」！？「

ラベルを読み上げた俺は驚愕した

なつ・・・

一体どうなつてやがる？

なんかの懸賞でも応募したか？

景品のあるイベントクエストなんてあつたか？

連斗は必死に心当たりを見つけようとしたが無駄だった

わからない、間違いか？

いやでも宛先は・・・

俺だ

ゆっくりと段ボールを開ける

そこには

連斗「新モンスターハンター・・・？」

こ・・・これは・・・！

とつさにPC画面を振りかえる

”モンスターハンター 新作発売決定！！！”

これだ・・・

これ以外には考えられなかつた

な・・・なぜこれがここに！？

間違いではないようだし、ますますわけがわからない

俺は一瞬躊躇したがディスクを取り出すとPCに挿入し起動した

連斗「・・・・・・」

”データを引き繼ぎますか？”

このシリーズお馴染みの選択をせまられる

連斗「引き継ぎ・・・つと」

”ゲームを始めますか？”

連斗「おうよ」

連斗ははやる気持ちをおさえ決定ボタンを押した

連斗「ん？いきなり密林から始まるのか・・・」

俺は慣れた手つきで次々とエリアを移動する

連斗「うおー？ クイーンランゴスター！？」

初期装備でいきなりボス級モンスターに出会ってはたまつたもんではない

連斗「やばいやばい！」

俺はやつとの思いでキャンプまで逃げかえるとそこには一人のハンターがいた

連斗「ん？ こいつは？」

ハンター『おい！』

連斗「何だ？」

ハンター『オレの支給品を！』

連斗「おいおい、何勘違いしてやがる、助けてくれよ

思わず独り言が漏れるがこれは俺の癖である

もちろん会話をしているわけではなく俺は淡々と決定ボタンを押し会話を進めているだけだ

ハンター『お前ハンターか？』

連斗「お！」

ハンター『ならこの船に乗れ、俺の村に連れて行ってやる』

ははん、なるほど、こいつのいる村が今回の舞台ってわけか

連斗は何だか懐かしい気分だった

だが何が懐かしいのか、何が自分をそんな気分にさせるのかはわからなかつた

どことなく気分のいいそれがそうさせたのか、期待で気分が高まつたのかは分からないが彼はハツキリとした意志がこもった声で言った

連斗「いくぜ！俺の新たなハンターライフの始まりだ！！！」

続・モンスターハンターへようこそ！～もう一つの物語～

ナオヤ「タオパイパイ？」

アッシ「ジンオウガだボケ、どこをどう間違つたらそうなるんだ」  
アッシがナオヤにもつともな突つ込みを入れる

ベア「で、そのモンスターがどうしたって？」

ケン「それは僕が説明するよ」

受付のケンが割つて入る

ケン「ここからはかなり離れた場所に生息していたモンスターなん  
だけど、最近になつてマスク村の近辺でも目撃されるようになつた  
んだ」

連斗「へーえ、で、俺たちにそいつを狩る依頼が来たつてわけ？」

ケン「That's right」

ナオヤ「やつてやろうじやん？てめえの居場所つてやつを叩き込んでやんよ」

ナオヤがいきがる

ベア「うーん、一体どんなモンスターなんだい？」

オカ「そいつはわしが説明しよう」

村長のオカ・シモが割つて入る

オカ「タオパイパイは・・・」

ケン「ジンオウガです」

オカ「ゲフンッ・・・ジンオウガは牙竜種といわれる種属でな、雷  
狼竜とも呼ばれておる」

連斗「そんなことはどうでもいい、対策を教えて」

オカ「それは知らん」

連斗「なるほ・・・は？」

オカ「わしはハンターじゃないからな、それは自分たちで調べるの  
が筋つてもんじゃろう」

俺の後ろでは村長に殴りかかるとしているアッシをベアが必死になつて抑え込んでいた

ケン「おっさんちょっと・・・」

ケンが村長を受付の裏に連れていく

ガシッボカツ

ケン「やあ、すまないね、改めて説明するよ

爽やかな笑顔で再登場したケンが言つた

ケン「雷狼竜という名前の通り、奴は放電能力を持つているんだ」

ベア「放電・・・」

ケン「うん、超帶電状態といわれる電気をまとつた状態になつた奴は何人たりとも止めることができないと聞くよ」

ナオヤ「ゴクリ・・・」

アッシ「雷をまとわせなければいいんだろう?」

ケン「まあそうなんだろうけど、これ以上は僕もわからないんだ」

連斗「十分だ、出発の準備に取り掛かるぞ」

こうして俺たちは各自解散し深夜のクエストに備えた

俺が弾を買いにアイテム屋へ向かう途中に通りかかったアッシの家からはこんがりと香ばしい匂いが漂ってきた

ベアの家からも光が漏れていたがアッシュのことだ、武器の手入れをしているのだろう

俺は点検を済ませると仮眠を取るためにベッドに横になつた

そういうえば、さつき武器屋の前を通りかかつたらナオヤがゲリヨスの素材を片手に武器屋のミノ・ムラと言い争っていたがあれはなんだつたんだろう

ナオヤ「ここが渓流か・・・幻想的だぜ」

頭だけゲリヨス装備のナオヤが言つた

ベア「そうだね、でも景色に見とれている暇はないよ

連斗「肉に見とれている奴はどうすんだ」

俺はこんがり肉を平らげているアッシを尻目に言つた

アツシ「ハンマー使いなんだから当然だろ！」

ベアは呆れたような顔をしていた

ナオヤ「それにしても元々違う村の近辺にいたなら慣れているそこ  
のハンターに任せればいいのによ、えーと何て村だっけ、ゆ・・・  
ユ・・・」

アツシ「コツケ村？」

連斗「肉から離れる」

俺はそう言い捨てるにキャンプを後にした

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0406o/>

---

続・モンスターハンターへようこそ！

2011年9月21日19時19分発行